

第2章 川越市の維持向上すべき歴史的風致

平安時代に在原業平が書いたといわれる「伊勢物語」の一節に、「住む里は武蔵国入間の郡みよし野の里なり」とある。これは藤原氏を名乗る母を持つ娘が、都から来た人に送った歌で、「みよし野の田の面の雁もひたぶるに君がかたにぞ寄ると鳴くなる」と続く。三芳野の里の場所については諸説があり、市内だけでも、入間川に面する霞ヶ関地区や伊佐沼周辺、川越城（別名「初雁城」）周辺などがあり、特定することは難しい。しかしながら、何れの土地も、古くから人の住まうところであり、時代の変遷とともに、ある時は郡の要衝を担い、館を構え、戦渦に翻弄されながらも、営々と田畑を耕し、集落を形成し、その土地の文化を育んできた。三方を川に囲まれ、遠くに富士や秩父の山々を望む風景は、都市化するなかにも大切にされてきた川越の心象風景であり、それぞれの地区には、人々の生活や活動とともに培われてきた特色ある歴史的風致が存在する。

この一端は、各地区に伝わる祭礼にみることができる。祭には、天候が穏やかで作物が豊かに実り、災いがなく安心して暮らせるようにという願いや、収穫への感謝の気持ちが込められている。長い間大切に受け継がれてきた祭には、

今も人々を結びつける役割を果たし、地区相互の交流の場にもなっている。

川越は江戸の北の守りとともに物流の拠点として重要視され、江戸幕府と密接な関わりを持ち続けていた。江戸との交流は、江戸文化を随所に取り入れ、「川越祭り」や「蔵造りの町並み」に代表される川越文化の興隆をもたらした。また、城下町商業は、農村からの物資集荷と同時に農村への物資供給の役割を果たし、中世からつづく門前とともに繁華な界限を形成し、同時にマチとサトとの交流を深めていった。

川越は、古くからヒトとモノとが交流するマチとして発展し、それは現在にも引き継がれる特色となっている。今回の計画では、川越市内に存在する歴史的風致のなかでも、これを端的に表す川越旧市街地に着目し、「川越祭り」「物資の集散」「寺社門前の賑わい」を歴史的風致として位置づけることにする。これら3つの歴史的風致は、江戸と川越との関係を色濃く残し、マチとサトとの関係により成り立っている。それぞれの歴史的風致は重層的に存在しており、相互に補完しあうことにより、川越の良好な市街地の環境を形成している。



川越の歴史的風致の概念図

1 「川越祭り」にみる歴史的風致

川越祭りは、現在、10月の第3土日に、川越の象徴である蔵造りの町並みを中心とした旧川越城下の十カ町周辺地区を主な舞台として開催される。平成22年には80万6千人の観光客を集める川越最大のイベントとなっている。その起源は、川越氷川神社の秋の例大祭であり、360年以上の歴史を有す。

江戸初期の川越城主であった松平信綱は、氷川神社を城下町の鎮守とし、市を開催していた上五カ町（江戸町、本町、南町、喜多町、高沢町）と、その他の下五カ町（上松江町、多賀町、鍛冶町、嶋町（志義町）、志多町）を合わせた十カ町を氷川神社の氏子と定めた。そして、信綱は慶安元年（1648）に、神輿・獅子頭等の祭礼用具を奉納し、祭の執行を求めたのが、川越氷川祭礼の始まりである。（「武蔵三芳野名勝図絵」享和元年（1801）による）旧暦9月15日の神幸祭には、神輿の行列の後に、十カ町が山車を先頭に、屋台・曳物・練物・仮装行列などの風流を伴い随行した。川越は、江戸に最も近い城下町であったため、付祭りは天下祭と呼ばれた赤坂山王祭礼・神田明神祭礼の影響を強く受けていた。

明治時代になると、川越氷川神社と有力商人が中心となり、祭の運営にあたった。明治21年（1888）に、十カ町以外の六軒町が初めて祭に参加したが、明治後期になると米穀と織物産業の集散地であった川越の経済は下降し、川越氷川祭も御大典や市制施行何十周年等の大きな行事と合わせて山車等が出されるようになった。戦後は、昭和21年の新憲法発布記念にいち早く山車を出した記録がある。昭和23年に中原町が、昭和27年には、下松江町・宮下町・連雀町・



重要無形民俗文化財「川越氷川祭の山車行事」

末広町が屋台をしたてて、祭に参加するようになった。昭和43年「川越氷川祭山車」10台が県の有形民俗文化財に指定され、また、同年「川越まつり協賛会」が発足する。

川越まつり協賛会は、「永い歴史と伝統を誇る川越まつりを保存し、また、全市的なまつりに発展させることを目的」にしており、「川越まつりの山車・屋台等の保存・企画・実施等」の事業を行っている。このときから「川越まつり」は市民まつりとして位置づけられ、全市的な広がりを持つようになる。西小仙波町・岸町2丁目・脇田町がこの年から参加するようになり、徐々に参加する町内が増えるようになった。

川越祭りは、江戸時代には9月15日が祭日であった。明治時代になっても、9月15日を守っていたが、明治44年から新暦の10月14・15日に行われるようになる。

市民まつり、観光まつりの位置づけの高まりから、土日移行の動きが出、平成9年から山車行事は10月の第3土日に変更されたが、神社祭事は、旧来通りの10月14・15日に行われている。平成17年に「川越氷川祭の山車行事」として、国の重要無形民俗文化財に指定されると、神輿の行列に、

氏子町内の山車行列が続くという本来の形に戻すという機運が高まった。平成 19 年には、例大祭は旧来の 14 日、神幸祭は第 3 土曜日に行われた。

このように、現在の川越祭りは、市民まつり、観光まつりとしての「川越まつり」を、川越氷川神社の秋の例大祭である「川越氷川祭」に融合した形となっているのである。



札の辻での曳っかわせ



川越氷川神社



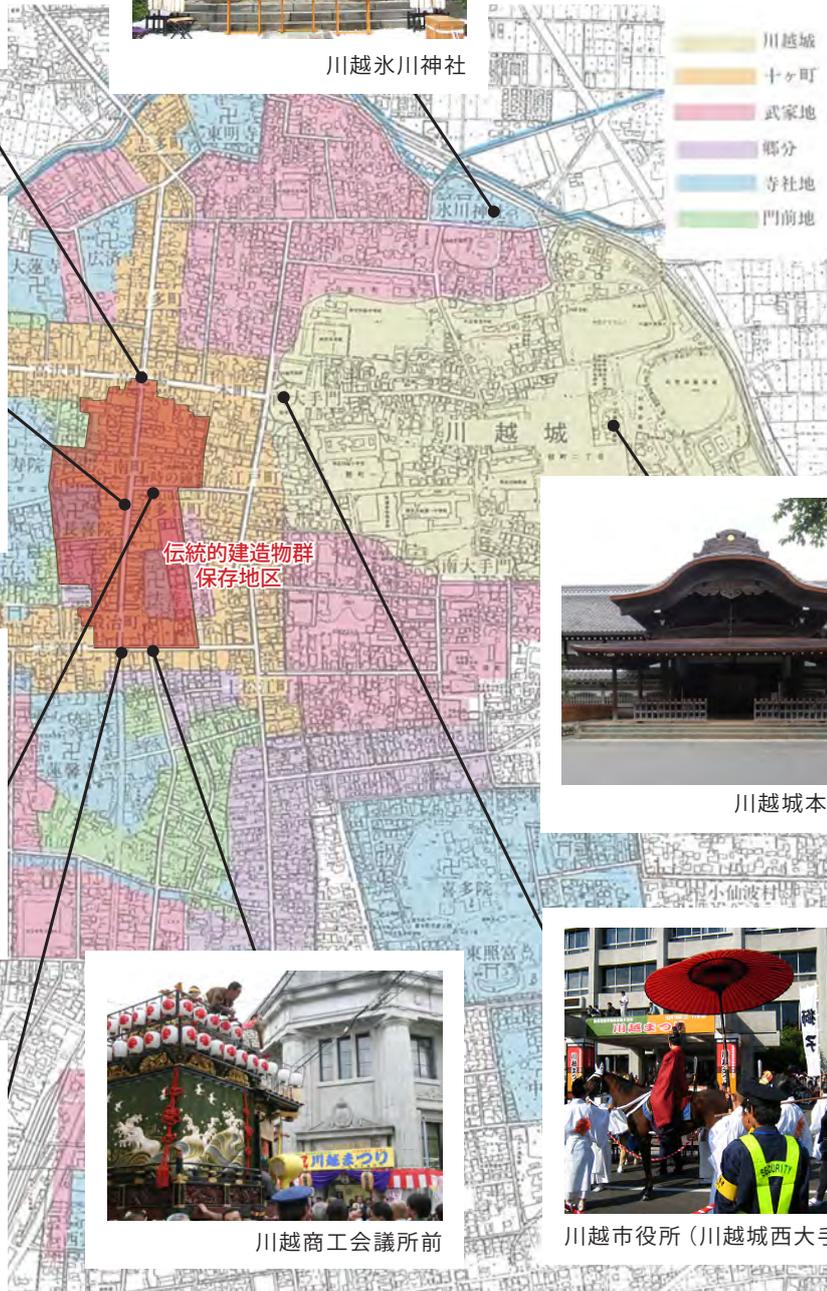
蔵造りの町並み



時の鐘



仲町の交差点



川越城本丸御殿



川越市役所 (川越城西大手門跡)



川越商工会議所前

旧城下町域と川越祭り

(1) 川越祭りの成立と発展

ア 川越氷川神社の歴史

川越十カ町の総鎮守である川越氷川神社の創立は、欽明天皇の即位2年(541)武蔵国足立郡氷川神社(現大宮氷川神社)を分祀したと氷川神社由緒に伝わる。「お氷川さま」と呼ばれ、川越の総鎮守として篤い崇敬を集め、親しまれてきた。室町時代の長禄元年(1457)川越城を築城した太田道灌は、当社を篤く崇敬し、「老いらくの身をつみてこそ武蔵野の草にいつまで残る白雪」という和歌を残している。その後、江戸時代に入り、歴代の川越藩主の尊崇も受けた。本殿(嘉永3年(1849))と境内の八坂神社社殿(寛永14年(1637)明治5年(1872)再々移築)は県指定有形文化財となっている。本殿は銅板本葺入母屋造で千鳥破風付の屋根、向拝部分には唐破風をあしらうなど凝った造りとなっており、壁面には50種類におよぶ江戸彫による精巧な彫刻が施され、なかでも川越氷川祭の山車を題材とした彫刻は豪壮華麗である。末社の一つである八坂神社社殿は寛永14年(1637)に江戸城二の丸東照宮として建立されたが、後に空宮となったので明暦2年(1656)川越城内三芳野神社の外宮として移築された。さらに明治5年(1872)に現氷川神社の境内に移された。銅板本葺入母屋造の屋根を持ち、江戸城内の宗教的建造物としては、全国唯一のものとして歴史的価値が高い。

イ 川越氷川祭の歴史

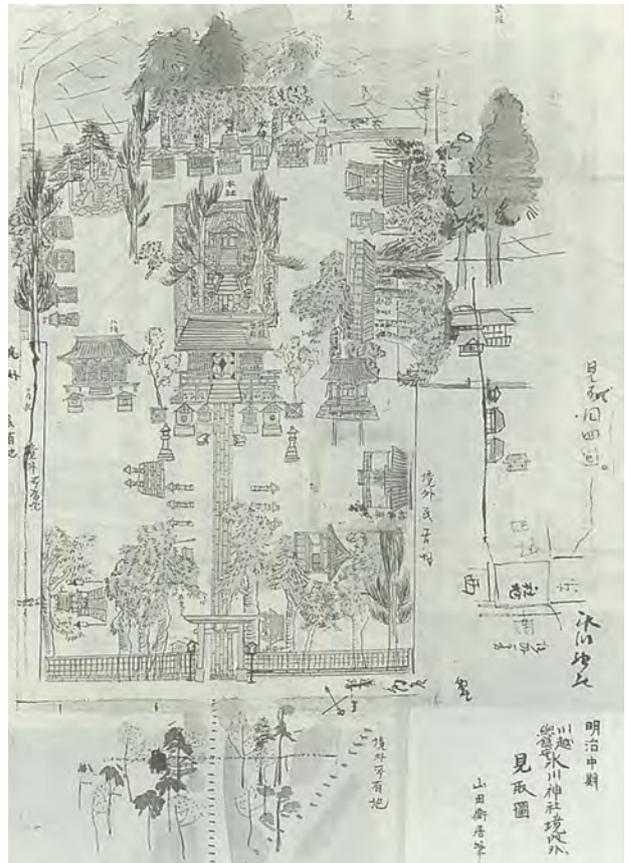
川越氷川祭の起源は江戸時代の初期にさかのぼる。寛永15年(1638)の大火後の川越藩政や城下町が整備されていく慶安年間、藩主松平信綱の時代である。享和元年(1801)に川越鍛冶町名主の中島孝昌の編



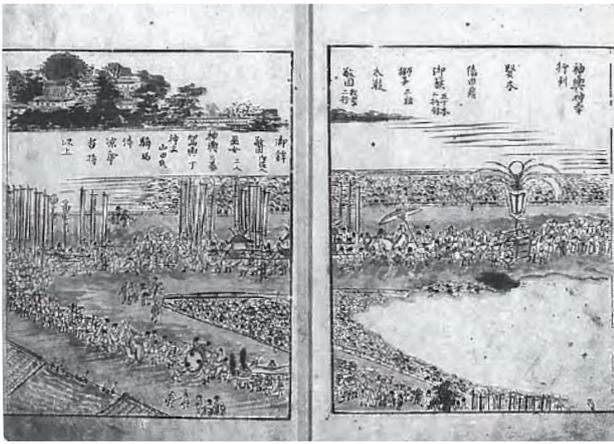
川越氷川神社 本殿



八坂神社 社殿



明治中期 川越総鎮守氷川神社境内外見取図
川越氷川神社蔵



中島本 武蔵三芳野名勝図会 享和元年(1801)
川越市立博物館蔵

述した「武蔵三芳野名勝図会」には、慶安元年(1648)に信綱が川越氷川神社に神輿二基・獅子頭二頭・太鼓などの祭具を寄進して、その年から神幸祭を行い、神輿が巡行されたと記されている。慶安期は藩政が整備されてくる時期であり、一方、寛永の大火で焼失した城や城下町の再建も着々と進められ、承応元年(1652)に城の土手、翌2年の6・7月頃には大手門が完成している。信綱が川越にはいつてすでに十年。焼け野原となっていた町も次第に整備され、十カ町の町割りによる都市計画も実現している。新河岸川による年貢米を中心とする藩主導の舟運も順調で、新田開発などの事業も進んでいる。万治3年(1660)の榎本弥左衛門「万之覚」には「河越町氷川神社にまつり初まりしは、慶安四卯年九月二十五日(1651)……。此のおこりは、この年大袋新田、奥富の本村(川越藩領)田畠大いにあたり申候故……今迄川越程の所に何のまつり事なきこと、いたづらごととて。」とある。そこで、家老等が相談の上同月25日に「俄にまつり成したく仕候て二十五日わたり候……其後九月十五日に極り申候」と記す。

城下町の鎮守であり、各地から城下に集まる人々の精神的な拠り所として、町民のエネルギーの結集を図り、氷川大明神の祭礼を江戸の山王権現や神田明神に倣って賑

やかに盛大にすることで、城下の安寧を願ったものである。

このように、藩主の命によって始まった川越氷川祭は、江戸時代をとおして神輿の修復など財政的に藩主の厚い庇護を受けた。寛延2年(1749)の「川越索麵」、宝暦3年(1753)の「多濃武之雁」からは、「氏子屋台をしつらい、時の踊を催し、領主入国の時は是を遠覧あり」と藩主在城のときの上覧をほのめかしている。また、「武蔵三芳野名勝図会」には氷川祭礼のこととして、「9月10日頃より氏子の町々は幡を建て、9月15日の祭礼神輿巡行は隔年に行い、子、寅、辰、午、申、戌の年には祭礼を行い、丑、卯、巳、未、酉、亥の年は休年。」とある。元禄11年(1698)9月、初めて高沢町(現元町2丁目)より踊り屋台を出したことを記録し、「これより年々数寄を好んで、時代の流行をたくみに取り入れた色々の造り物や風流を上五カ町、下五カ町と練行の列を定めて12日、13日は町揃い試踊り、14日15日町々引渡し、16日は笠脱ぎとってその町々において踊りを催して終わる。祭礼の当日は、



川越索麵 寛延2年(1749)以前
川越市立中央図書館蔵



多濃武之雁 宝暦3年(1753)
埼玉県立浦和図書館蔵



文政9年(1826)川越氷川祭礼絵巻 川越氷川神社蔵



川越大火焼失地図 川越市立博物館蔵



氷川祭礼絵馬 天保15年(1844) 川越氷川神社蔵



足立屋呉服店(明治26年建築)明治30年頃の写真

遠近の貴賤群集して、町々家々棧敷をかまえ、外觀を華やかにし、きわめて珍しく壯観である。」と記している。川越氷川祭は、江戸時代を通して、藩主の主導で川越氷川神社と町方、特に川越氷川神社に隣接している本町・喜多町・高沢町・南町・江戸町などの大商人を中心に、城下十カ町の氏子が一体となり、新河岸川の舟運と川越街道によってリアルタイムに入ってくる江戸の風流、風俗を取り入れながら、徐々に発展した。現代の祭礼儀式、しきたりや囃子の源流も文化・文政時代(1804～1830)まで遡ることができる。文政9年(1826)の「氷川祭礼絵巻」には、神幸する神輿を先頭に列をなして川越城に向かう笠鉦形式の山車と踊り屋台などの付祭りが克明に描かれている。また、天保15年(1844)の「祭礼絵馬」では、すべての山車が一本柱形式に統一され、勾欄に人形を乗せているのがわかる。

明治以降の川越氷川祭は、藩政時代に城主からの命で行われたものから大きく変化し、

氏子十カ町の大商人と神社がリードして、氏子域の拡大を図りながら運営されるようになった。明治期の川越は米と織物の大集散地として富商が多かった。また、氏子十カ町の祭りは徐々に参加する町を増やし、明治20年には十カ町に加え、宮元町・神明町・六軒町・下松江町・久保町・石原町・猪鼻町・橘町・相生町の九カ町が加わっている。この時期はとくに天皇即位や市制施行などのように国や市の祝事に結びつく大祭となる傾向があり、そうした中でも、明治26年(1893)の川越大火からの復興がなされ、川越氷川神社の玉垣竣工を記念して行われた明治34年(1901)の祭礼は盛大に行われた。戦時下を経て第2次世界大戦後の昭和23年には、戦後復興を祈念し、敗戦によって沈滞化した町の活性化を図るため、川越氷川神社の例大祭を機に、川越市と川越商工会議所が合同で「川越商工祭」を開催し、山車の曳行も行われた。そして翌年には「川越商工祭」が「川越祭」となった。

昭和43年には、「川越まつり協賛会」が設立された。組織の構成は、会長を川越市長とし、山車保有町内協議会に加入している自治会・自治会連合会・商工会議所・観光協会・商店街連合会・その他の関連団体である。以後、川越祭りは、この協賛会を母体に「市民まつり」として位置づけられ、現在に至っている。同会を通しての補助を得て、川越祭りには毎年、川越の山車の半数前後が出るようになった。近年では、山車持ち町内が増え、氷川神社の氏子域外の町内が氏子域を上回る状況ともなっており、さらに、関連行事として町内祭りに山車を曳く新宿、大塚新田などの区域もある。なお、川越氷川神社の祭礼は10月14・15日と決まっている。

しかし、山車持ち町内の人々や観光客の都合などから「土日開催論」が強くなり、平成9年から山車の曳き回しが10月の第3土曜・日曜となった。

ウ 山車

山車祭りは、川越氷川神社の例大祭の付祭りとして発展した。川越祭りの山車は現在29台（ほかに川越まつり協賛会に属さない山車が4台）存在する。この内県指定有形民俗文化財に指定されている10台の山車の特徴は、江戸時代後期に現れる二重鉾型に囃子台が付く構造で、江戸様式を顕著に伝える鉾山車である。三つ車または四つ車にせいご台を載せて、その上に二重の鉾を組み、上層の鉾に御神体である人形を飾る。人形は神話や民話、あるいは武家にちなんだ人物などから題材が選ばれている。多くの山車が廻り舞台になっているのも特徴である。下勾欄をつけた上枠と、それを受ける下枠の中心点が心棒で、囃子台を360度水平回転させる軸となる。このように、山

車の上部全体が回転する構造は、八王子、青梅、成田、本庄、熊谷、栃木、高崎など関東各地に伝わる江戸型の山車の中でも例が少ない。各町内の会所や、他町の山車と出会った時など、お囃子を演じている正面を素早く向ける目的から生まれたものである。こうした山車の仕組みは明治時代の後期になって川越が独自に工夫したものであり、目抜き道路が無理なくすれ違える10m程度の道幅を持つ川越ならではの都市構造にも関係する。現在の川越祭りで、最大の見どころとなっている「曳っかわせ」は、山車の回転構造が出来上がった明治から大正期にかけて、祭礼を盛り上げる一つの演出として始まったものである。山車は、毎年15台前後が参加する。山車をださない年も会所を設けると共に、櫓を組んで囃子連が参加することが多い。市制施行の10年ごとの記念には全台に近い山車の登場もある。

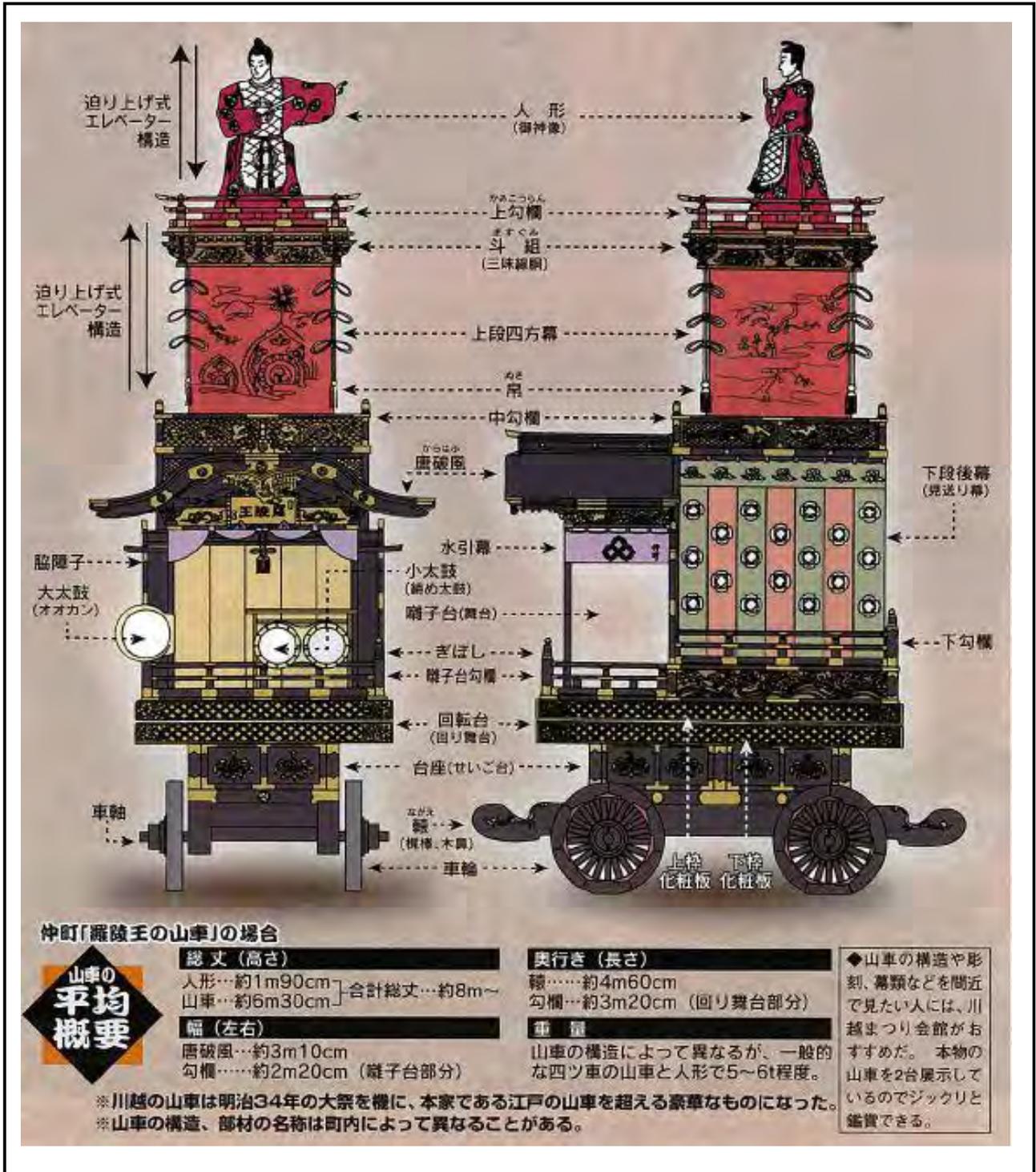
県指定10台の山車の人形は、山車の製作請負を含め、江戸後期から幕末にかけて活躍した江戸の代表的な人形師、原舟月（二代目）鼠屋五兵衛（十五代目）、仲秀英（三代目）などの作である。10体の山車人形の中で、仲秀英作は5体と最も多く、幕末の名工仲秀英の人形がこれほど残っているところはほかにないといわれる。ちなみに鼠屋五兵衛は、代々五兵衛を名乗る十七代続いた江戸の人形師の名家で、山王祭りや神田祭りの山車人形師としてその名を広く知られている。こうした人形師の系統を引く人形が、川越の山車には生きているのである。

山車幕は、その特徴の一つに文様がある。山車幕意匠の主題には、天界を自在に飛翔する龍と渦雲や流水の文様が多い。これは神田祭りを始め、江戸の祭礼につきものの練り物や山車の装飾に、龍関係のモチーフが最も多く使われていることに影響を受けて

いる。幕に使用されている染織品は、絹織物・毛織物が圧倒的に多い。絹織物では、緞子・金襴で、毛織物では羅紗である。そして加飾技法として刺繍や型染が行われている。

川越では、祭りが終わると山車をすべて解体し、部品は町内の主だった商人の蔵に手分けして収蔵する習慣があり、専用の山車蔵を持たなかった。最近では分散すること

なく1カ所の蔵に置いたり、組み立てたまま新設の山車庫に収蔵する町内が増えている。松江町2丁目の山車は解体され、元米穀商の原田家(足立屋)の蔵に部品ごとに納められている。原田家の米穀問屋としての構えは、現在も店蔵、住居、文庫蔵、倉庫蔵という形で往時のままに残っており、店蔵は建造物としてその他は史跡として市の



山車の平均概要 「川越専科」秋だより (株)ぷらんず

文化財に指定されている。幸町の旧南町の山車は、行伝寺門前にある町内所有の蔵に、大手町も町内所有の蔵に、喜多町の山車は町内篤志家の土蔵に納まっている。

エ 祭りの舞台となる町並み

祭りの舞台である町並みの中心部は、主として明治中期から末期に建設された重厚な蔵造り町家を中心に近代洋風建築等も含めた伝統的建造物が建ち並ぶ。川越市川越伝統的建造物群保存地区は、特色ある歴史的景観をよく伝え、価値が高いものとして、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。札の辻を北端とし、仲町を南端とする中央通り沿いの南北約430m、東西約200m、面積約7.8haの範囲で、近世初期以来の十カ町四門前の町人地の枢要部を占めている。地区内では江戸時代から蔵造りの町家が一部建設されていたが、明治の川越大火後、その復興にあたって、商人たちはこぞって防火性能の高い蔵造りを採り入れた。そのため中心街は黒びかりのする江戸の粋をそのまま移したような町となった。

明治34年(1901)の祭礼は、そのような町並みに江戸型の山車を出し、大評判となった。

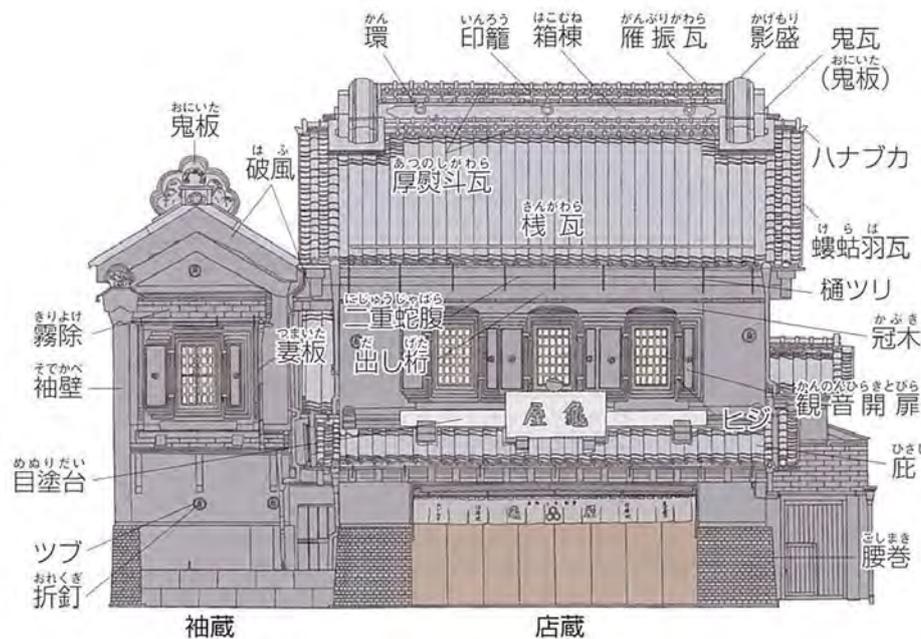
東京から「風俗画報」の記者が来て、同紙第258号に八木橋仲秋氏の紀行文と共に山本松谷(昇雲)氏の描く挿絵によって、その詳細を載せている。「近郷の者は申すも



「風俗画報」第258号「武州川越の大祭」 個人蔵



蔵造り商家の屋敷配置図
(煙草商万文 現川越市蔵造り資料館)
まちづくりガイドライン



【蔵造り町屋の正面】(山崎家住宅) まちづくりガイドライン

愚か、遠郷遠里集まるもの雲の如く織りなす群衆引きもきらず、さすが目抜き場所柄なれば、鍛冶町、志義町の角あたり、爪も立たざる賑ひとは、近来稀なる大祭というの外なし。殊に今年は古の例に立ちかえり、9月14日、15日の秋の月夜を当て込みたれば、さやけき光は又一入の眺め増してぞ賑しける」と祭りの状況を記述している。昭和8年の中央通り開通以前の志義町（現仲町）であり、当時は丁字の交差点ではあるが、すでに祭りの中心地となっていることを伝えている。

伝建地区内では、明治40年（1907）頃までに重厚な蔵造り町家の並ぶ町並みが形成された。さらに、大正期以降、近代洋風建築や洋風外観の町家等も加わった。地区内の地割りは、複雑な街路形態を反映して一定ではないが、おおむね間口数間、奥行15～20間の短冊型である。伝統的建造物の約8割が町家で、その大部分は蔵造り町家であるが、一部真壁造り町家や洋風外観の町家もある。蔵造り町家は、表通りに面して巨大な鬼瓦・影盛と箱棟を持つ切妻もしくは入母屋・棧瓦葺・平入・二階建の黒漆喰塗りの店蔵を構え、その奥に座敷、離れ座敷、蔵などを棟を分けて配置している。蔵造り町家の一階正面には主として土戸を収納する戸袋が両袖または片袖にあり、揚戸で戸締めしていた。二階は主として観音開の土扉で、一部に横長の格子窓が見られる。川越の蔵造り町家で最古のものは寛政4年（1792）建築の大沢家住宅で、18世紀末の川越の蔵造りの姿を伝えている。このほか大正7年（1918）建築の埼玉りそな銀行川越支店（旧第八十五銀行本店本館）等の近代洋風建築があり、また背後には伝統的外観の和風住宅や寺社等が分布し、時の鐘が地区のシンボルとしてそびえている。

町並みにおける祭り仕立ては「軒端揃え」である。祭りの範囲を示す紅白の水引幕が軒先を飾る。また、町内の迎賓的役割となる「会所」の設営は、伝統的な町家を選び、水引幕を張り、軒に高張り提灯を下げ、青竹囲いのなかに風流な前庭をつくるなど、こだわりの町内も多く存在する。

（2）川越祭りの行程

ア 祭りの準備としつらえ

川越氷川神社で創建以来続けられた秋の神事が、毎年10月14日（旧暦9月14日）に行われる「例大祭」であり、氷川大神への感謝と、氏子崇敬者の健勝が祈られる。「旧9月の14日をヨミヤ（宵宮・忌宮）と称し、15日は隔年神輿^{みこし}の神幸が行われてきました。



10月14日 例大祭の神事



川越氷川神社前幟旗の様子

神社では13日の晩お灯笼に火を入れ、町内では11日頃から幟旗を立てることになっていました。……江戸期の祭礼には林のように幟が立ったものでした。昔からの氷川の氏子である伊佐沼、北田島では、今も字の中央に幟立て場があって、氷川のお日待に限って、13日の夕刻氏子当番の人達等によって昔のままに幟を立てることになっています。幟の頂には御幣をつけ、幟には神徳を称えた文字が染め抜いてあります。」(先々代の川越氷川神社宮司、山田勝利氏による「川越氷川まつり」より。川越市立博物館常設展示図録)これに続く「神幸祭」は、氷川大神が神輿に乗って川越城下の氏子の町々を巡行することで人々はその御神徳を得、幸福と町の繁栄を祈請する、という儀式である。この神幸祭は、現在川越祭りの初日に

合わせて行われている。

川越祭りを前に、その準備が始まる。川越祭りは、さまざまな人たちが関わる祭礼行事であり、それは、祭り当日だけにとどまらない。祭りで使われる着物、提灯、草履などを調製する職人たちは、裏方を支える大事な祭り人たちだ。そして、軒端揃え、山車の切組(組立)、会所開き、山車小屋の設営は町内のほとんどの家が参加して行う。

祭り前週の週末頃から各町内の通りには、紅白の水引幕が張り出される。この軒端揃えは、祭りの範囲を示すものであり、山車巡行の場を示すものとして行われる。町内の囃子連の稽古の音にも気迫がこもり、祭礼ムードは一段と盛り上がる。前々日あたりからは設営が始まるまつり宿を、会所または神酒所と呼び、人と人との晴の席であ

祭りの準備	会所	山車
 <p data-bbox="261 1355 571 1384">仕立屋による祭り衣装の準備</p>	 <p data-bbox="799 1355 997 1384">会所の設営 (仲町)</p>	 <p data-bbox="1091 1355 1434 1384">山車小屋の組立 (松江町2丁目)</p>
 <p data-bbox="357 1684 571 1713">軒端揃えの飾り付け</p>	 <p data-bbox="778 1684 997 1713">人形の着付け (仲町)</p>	 <p data-bbox="1235 1684 1434 1713">山車の切組 (仲町)</p>
 <p data-bbox="172 2011 571 2040">お囃子の練習 (松江町2丁目 小島家)</p>	 <p data-bbox="730 2011 997 2040">祭壇の飾り着付け (喜多町)</p>	 <p data-bbox="1161 2011 1434 2040">山車小屋へ収納 (大手町)</p>

る。毎回の常宿はないが、会所の場所の選定には穢のないことを第一条件とし、原則として祭り年行事組のなかから宿を選んでいった。まつり宿にふさわしい趣のある町家が決まると会所の設営にとりかかる。床を拭き清め、周囲の壁面に紅白幕を張りめぐらす。正面には氷川大神等の軸を掛け、金屏風を立てて祭壇を設ける。山車の御祭神（人形）を飾り、会所の入口には七宝模様の水引幕を張り、軒に町名入りの高張り提灯をさげ、屋根には丸型提灯で飾りたてる。その下には青竹囲いのなかに、青葉が薫る樹木と草々、石灯籠、つくばい、蓬莱山を表した岩の前に宝船の舟形石が置かれた石組みなど、風流の前庭をつくる。これは祭

礼の時に神が天降る目標となる山を現した飾りで、まつりの精神的な根源である。また昔は町火消の纏や、竹梯子に竜吐水と消防一式を備え、火災には万全の体制を整えて祭りに対応したというが、今は纏のみを飾り、僅かに昔の面影が偲ばれる。防火の町、川越ならではの飾り付けである。つづいて山車小屋の仮設を行う。前日になると、待望の山車の切組である。町内の男も女もそれぞれに分担し、全員参加で行う。山車の組立は、主に鳶、大工の仕事。男たちは欄間や細い柱が入った箱を運び、女たちは箱から部材を出し、雑巾で乾拭きする。そして、大切な人形の着付けは特に長老や女性の仕事である。前夜祭となる「会所開き」は、

祭りの職方

祭りの準備と山車の運行には、職方の力が必要である。山車を組立て、曳く際は「端元」と呼ばれて、曳き方の中心となる鳶職と、山車の組立てと、運行の際には電線等に山車がぶつからない様に山車の上で活躍する大工がおもな職方である。職方は、基本的には町内と各々の職人との地縁関係で決まっていた。特に鳶職は、江戸の町同様、各町内に「町内頭」がいた。町内頭は、消防をはじめ、建築の地形や町内の道路の保全など、本来、町の住民が共同で行う作業を代行して引き受けていた。各家の吉兆慶弔には町内頭が呼ばれ、年始廻りのお供に、嫁入り荷物の宰領や、歳の暮の門松立て、花見遊山や娘や子供のまつりのお供に出て途上警護の役目をする仕来りは昭和初期までであった。蔵造りは各々の屋根の高さは異なっても、下屋の軒高は揃っており、ここに目塗り台という渡しがある。これは、いざ火事という際には、町内鳶が下屋庇を隣家に渡りながら外側から観音扉を閉め、土で目塗りを施すための装置である。町内の祭りの作り物や山車の組立は彼等の独壇場であり、普段はマチの裏方に徹する鳶の頭達にとって、山車の運行の責任者となる祭りはハレの舞台なのである。鳶頭が歌う江戸木遣も川越鳶組合の「川越の木遣り」として市無形民俗文化財に指定されており、見所の一つである。



山車の運行での鳶職の仕事



山車の運行での大工職の仕事

ここまで取り組んできた飾り付けが無事にできあがったお披露目にあたる大切なセレモニーである。鳶の木遣りと山車の舞台での囃子が祭りムードを盛り上げる。

イ 祭り当日の行事

翌朝午前8時を過ぎるころ、祭礼役員と町方の山車係、職方衆が山車小屋に集合、山車の細部にわたり点検を行う。午前9時ともなると山車は会所前に移動し、囃子方も太鼓などの準備を整える。祭衣装に身を包んだ小粋な町方衆が会所に集まってくる。各町内ごとに揃いの着物と長襦袢を重ねて尻はしより、その下は股引と同柄の足袋をはき、祭草履をつっかけ。衿もとに町名入りの手拭いを掛け、手には祭扇子。色あでやかな娘衆の手古舞も、昔から川越祭りの華である。鳶や大工の職方衆は絆纏に、股引と腹掛けという粋な祭支度である。

やがて、会所の前で山車を曳き出すための神事が執り行われる。山車の正面に会所と同じような祭壇を設け、三方の上に米、酒、お頭つきの鯛、海藻、野菜、果物、塩などのお供えをする。斎主は川越氷川神社の神職が務める。神移りの儀、祝詞奏上、山車の清めとつづき、一同乾杯で町内の安全と祭礼の無事を祈る。午前10時の交通規制開始を待って、山車の曳き出しである。町内鳶頭によるめでたい木遣りが入る。祝いの歌詞をいくつか唄い、頃あいを見て鳶頭が山車の上の囃子方へ合図を送ると、すかさず囃子連による「打ち込み」が入る。バチさばきもかるやかな「屋台」の曲となり、舞台では白髪为天狐が舞う。一の拍子木をもった山車運行の責任者である宰領と、二の拍子木を手にした鳶頭が間合いをはかりながら頭上たかく拍子木を二つ鳴らす。と同時に「ソーレーッ」と山車を曳く練り子たち



1日目 幸町会所前 山車出発式



元町1丁目 山車出発前の鳶頭による木遣り

の歓声があがり、ギッギーと車をきしませながら山車がゆっくりと動き出す。山車の練行は、まず午前中の「町内曳き」から始まる。産土神^{うぶすながみ}を迎えた山車を隅々までお披露目する意味から、町内曳きを丁寧に行う町内は多い。

山車の曳き回しの先頭は先触れ方で、他町の会所や山車への挨拶、進行方向の確認を行う。つぎにジャランボウと呼ばれる金棒を手にして、山車の通路を整理する露払い。つづいて左右の綱先の位置を示す高張り提灯。町名と山車の名前を書いた江戸文字があざやかである。その後には保安方の町方衆にガードされた可憐な手古舞衆がいく。つぎに宰領を中心とした世話役衆が並ぶ。その後には小若の絆纏に鈴だすきの子供衆。そして山車の保安警護にあたる若衆たち。山車の端元まわりに注意をはらって



1日目 12:00 川越氷川神社参拜



1日目 13:00 神幸祭の出発



1日目 14:00 市役所前斎場



1日目 15:00 氷川神社還御

いるのが、実質的に山車の動きをコントロールしている副宰領と鳶頭。山車まわりは鳶職が固め、山車の運行と安全確認に取り組む。山車にはハンドルもブレーキもない。そこで、ブレーキ代わりや軌道を修正するために鉤状のバールを車輪にかませたり、方向転換をする場合はキリンと呼ぶ山車を浮かせるために掛ける大型ジャッキを用いる。川越氷川神社への挨拶をすませ、町内曳きから会所前に戻った山車と曳き方一同は昼休みとなる。

御神幸を迎える姿の整った山車行事初日の午後1時、川越氷川神社を出御する華麗な行列は、太鼓、氏子総代および特別崇敬者、小幡、榊、五色吹流し、社合旗、四神旗、猿田彦、獅子、楽人、神職、巫女、彦神の神輿、姫神の神輿、神馬、馬上に宮司、傘持ち、杵持ち、輿上に齋姫、付き巫女、宰領と続く。神職のほか、氏子域である神明町、三光町、宮元町、杉下町、伊佐沼、北田島、四ッ谷といった氏子と氏子青年会、鳶といった参加で行われる。太鼓を「ドン、ドン、カカカ、ドンドンドン、カカカ」と打ちながら行列が出発すると、神社前で待っていた宮下町の先導者2名が町内の境まで金棒を突きながら先導する。神幸中は楽人の道楽が続く。このあと、志多町・喜多町・元町2丁目・幸町・仲町・松江町2丁目・大手町・元町1丁目の順に旧城下の町並みを往く。町内ご



1日目 17:00 宵山 元町1丁目会所前

祭り囃子

山車の囃子台では神田囃子などの江戸の流れを汲む祭り囃子が演奏される。現在では山車持ち町内の囃子連が多いが、かつては各氏子のマチから繰り出す山車には、近郊集落サトの囃子連が乗り込む仕来りがあった。これは近郊近在よりの囃子の導入によって、祭りの対照範囲が大きく広がり、客寄せに大いに役立つと共に、生産者であり、消費者でもあるサト衆とのコミュニケーションの場とした町方衆の智恵でもあった。現在でも仲町の山車に乗るのは中台囃子連、六軒町には今福囃子連などと、マチとサトの囃子連という形が残っている。双方の囃子連ともに埼玉県無形民俗文化財に指定されている。中台では、1月の初顔合わせの新年会から始まり、2月に鳴り物・舞の寒稽古を行う。寒稽古では主に新入りの囃子方に対して稽古がつけられる。後継者育成として、夏休みと祭礼直前に子供の稽古が行われる。中台地区の氏神、八雲神社の春祈祷、7月の例祭宵宮に囃子を奉納する。8月の例祭当日には曳きまわされる屋台に乗り込んで囃子を奉納する。現在川越氷川祭りには38の祭り囃子団体の参加があり、流派ごとの交流や地元の氏神さまでの例祭、各種行事などでお披露目をし、腕を磨く機会も多い。囃子の曲目は「屋台」「ニンバ」「鎌倉」「シチョウメ」などがあり、笛、太鼓、鉦のリズムにあわせ、「天狐」「おかめ」「ひょっとこ」「もどき」「獅子」などが舞う。

各囃子連の対抗意識は、もともと山車に乗った神と神が出会いの挨拶を交わし、囃子の交歓を行う「引き合わせ」という儀礼から、川越祭りの見せ場である「曳っかわせ（引き合わせ）」という囃子競演へと移り、祭りを盛り上げてきた。十カ町という狭いエリアのなかで山車が曳きまわされるなかで、たびたび山車がすれ違い、挨拶儀礼がそれぞれの囃子の競演へと変わり、辻々に集結しての「曳っかわせ」へと転化した。川越の山車の特徴である廻り舞台はこれにより発展したものである。お互いの山車が最も得意とするお囃子を披露しあう場であり、向かい合う数台の山車が、囃子（笛、太鼓、鉦、踊り）で競い合い、まつり人たちは提灯を高々と振り上げ、歓声を上げる。そして、いつの頃からか山車の正面を向けあい、入り乱れた囃子の優劣を決める競演的な見方がされるようになってきた。



天狐



おかめ

武家と川越祭り

川越祭りの経路については、現在は交通規制の関係もあって、町内曳きのほかでは、本川越駅から札の辻の中央通りを中心としたエリアで山車の練行が行われている。「川越藩日記」の寛政6年（1794）9月8日の氷川祭に関する沙汰の中をみると、経路は宮ノ下・会所前・追手御門先・江戸町・北久保町・御棧敷前（南大手門と比定される）・清水町・堅久保町・南久保町・上松郷町・松郷・通町・横新田町・新田町・蓮馨寺・同寺南門前・堅門前・上松郷町・志義町・妙養寺門前・六軒町・堺町・妙昌寺門前・六反・十念寺前・杉原町・行伝寺門前・志義町・鍛冶町・南町・多賀町・南町・高沢町・石原町・高沢町・喜多町・志多町・五ヶ村・志多町・喜多町・本町・裏宿・宮ノ下となる。武家町を廻ったあと、現在の氏子域よりやや広い門前町・町郷分・松郷の分もくまなく回るようになっている。この道筋を現在の町名でたどると、宮下町2丁目・宮下町1丁目・元町1丁目・大手町・三久保町・松江町2丁目・松江町1丁目・通町・新富町1丁目・連雀町・松江町2丁目・仲町・末広町1丁目・六軒町2丁目・三光町・末広町3丁目・末広町2丁目・仲町・幸町・大手町・幸町・元町2丁目・石原町・元町2丁目・喜多町・志多町・神明町・宮元町・志多町・喜多町・元町1丁目・宮下町1丁目・宮下町2丁目となり、山車持ち町内が増えた現在の祭りエリアにも近い範囲であったことがわかる。

江戸時代の川越祭りは、川越氷川神社の氏子域である十カ町が山車やその他の風流を準備し、川越氷川神社の神幸祭に続いたものである。しかし、祭りは、町人達だけのものではない。神幸祭には氏子域の農村の人々が供奉し、近在からは多くの見物客が押し寄せるなど、様々な人が川越祭りに関わっている。もちろん、川越藩の家中の武士たちも例外ではない。

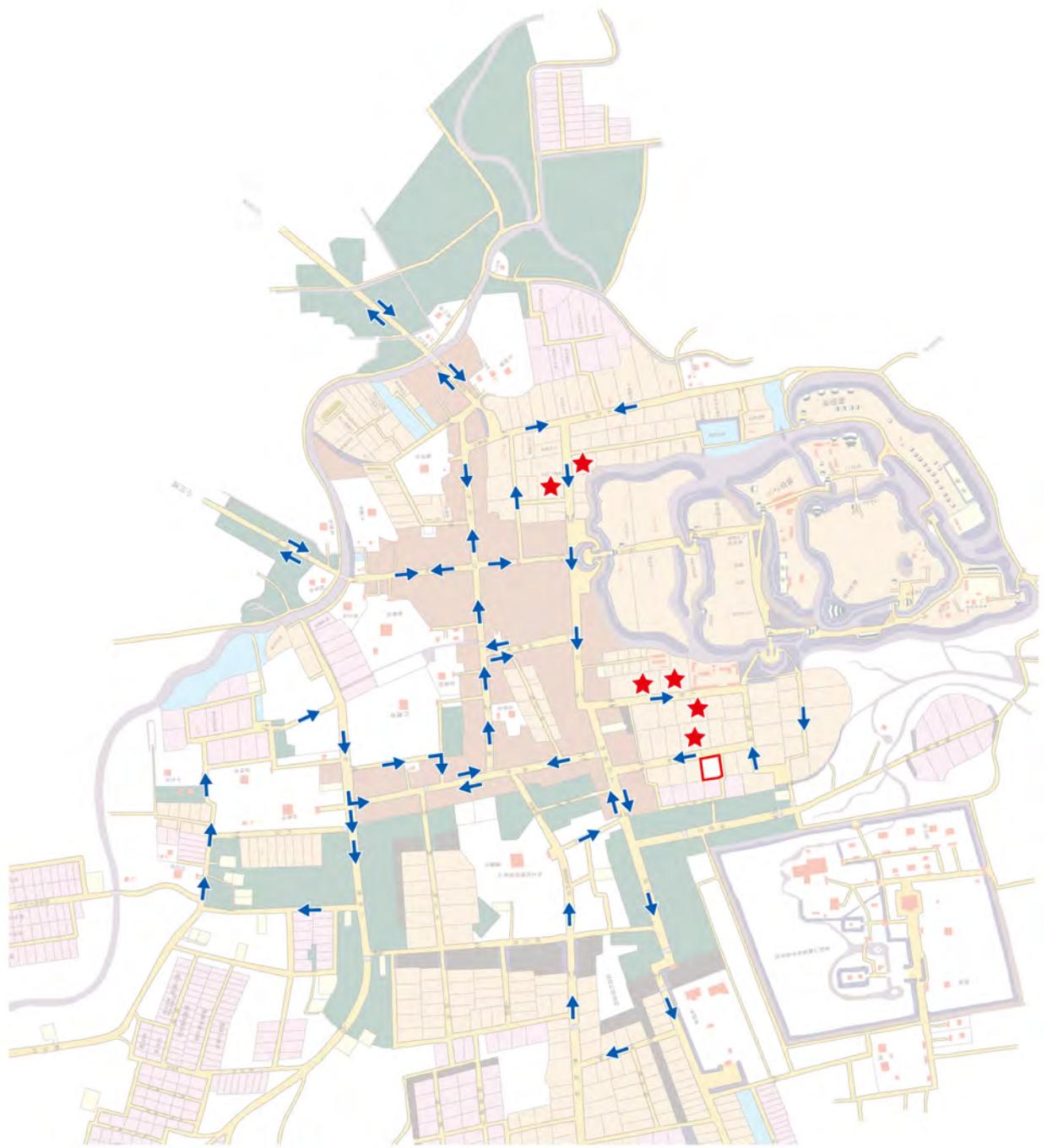
まず、神幸祭の行列には、袴を着用して神輿などの警固として出勤している。また、城下町に入る道を中心に15か所に、立番が配置され、不測の事態に対応するための警備体制が敷かれた。また、城下町祭礼では藩主が上覧することが重要な行事であり、現在の川越第一小学校の校庭付近にあった南大手門で行われた。ここに、棧敷が立ち、藩主が在城の場合は藩主が、また、不在の場合老中・年寄等が祭礼の番組を鑑賞した。

さらに、芸場での披露ということが行われた。神幸祭の道順にある主だった武家や商家の前で、屋台の上で演じられた舞踊や練子達の所作、仮装行列などが披露されたが、その場所を芸場と呼んでいたのである。

文久2年（1862）9月15日の川越藩日記には、23か所の芸場が記載されている。そのうち武家は8か所である。氷川神社を出発した神幸祭の行列は、現在の裁判所の前から川越街道を南下し、左に折れて北久保町を通過して南大手門に至り、南久保町からまた川越街道にでる。8か所の武家はその間にある。南久保町では山田才曹の家の前が芸場であった。現在、市指定史跡となっている武家屋敷「永島家住宅」の道を隔てた前の家である。ここで、各町が用意した様々な芸を、武士達が見物したことだろう。



文政9年(1826) 川越氷川祭礼絵巻 川越氷川神社蔵



- 此色当時○屋敷
- 此色土手并芝地
- 此色火除地
- 此色空堀
- 此色御用地
- 此色神社
- 此色長屋
- 此色道筋
- 此色堀并川筋
- 此色郷分
- 此色市中
- 此色御当代屋敷
- 此色御先代屋敷
- ★ 武家地における芸場
- 永島家
- ↕ 神輿等引渡道順

山車の練行 「川越藩日記」寛政6年(1794)より作成

との境で2名の先導者が待ち受け、行列の先導を引き継いでゆく。行列の経路にあたる氏子町内では、山車が御神幸を迎え、従いながらお供をする。午後2時、川越市庁舎前の斎場へと歩みを進め、斎場祭が行われる。かつて西大手門があった位置での儀式は、現在も川越城に向けての献辞である。祝詞の奏上につづき、中福の神楽舞の奉納が行われ、玉串奉納が行われる。その後再度宮下町の先導者に引継ぎ、午後3時前に川越氷川神社に還御する。

町内曳きを中心に行われる1日目のハイライトは「宵山の山車揃い」である。中央通り、川越街道を中心とする通り沿いに各町内の山車が飾り置きされる。居囃子とともに、豪華な山車の彫刻や装飾を間近に見て歩くことができる。夜のとぼりがおり、無数の提灯に彩られた山車は、やがて祭り囃子もにぎやかに、いっせいに曳きだされる。辻々では曳っかわせが始まる。翌朝早く、寝床の中で耳にする「一番囃子」。これは「明け囃子」ともいわれ、東の空が明けるころから各町の山車がいっせいに始める居囃子のことである。まつりの朝を告げる合図であり、遠く、近くに流れてくる囃子の音色は、祭礼の前奏曲である。早朝から軽快な祭り囃子が鳴りわたり、2日目の山車の練行が始められる。

午後ともなると、どの道筋にも山車の姿が見えてくる。松江町2丁目から大手町へ、市役所前の交差点にさしかかる。かつての川越城の西大手門があったところである。松平大和守家の「藩日記」(川越藩は明和5年(1768)から慶応2年(1866))によると、「明和7年9月2日に南大手御門先へ役棧敷を懸けるよう作事奉行に指示が出された。」とあり、14日には「老中以下の重臣に、明日六ツ半から大手御門先の役棧敷での見物が



2日目 13:00 市役所前(西大手門跡)

指示された。」とある。氷川祭礼は藩主をはじめ藩の重臣たちが見守るなかで進められ、多くの家臣が警備にあたるなど、藩をあげての催し物であった。現在は、ここ西大手門跡の位置で、川越城に向けての献辞を示す。市所有の猩々の山車が各町内の山車を迎える。ここを左に折れて札の辻へ向かう。札の辻は城下町時代には唯一の四つ角で、幕政時代のお触れの高札が立てられた辻であり、城下町の中心である。この四辻には雛市、盆市、晦日市がたち、東西南北に通ずる街道筋の道路基点であるばかりでなく、商業の中心地であり、かつまた信仰の中心地でもあった。四辻や三本辻、また橋のたもとという地点は目に見えざる神霊の往来する処であり、川越氷川神社の神輿もこの四辻の中央に据えられる仕来りであった。ここ札の辻をはじめ、それぞれの方向から山車が集結しやすい交差点は曳っかわせの見せ場である。札の辻では数台の山車による曳っ



2日目 15:00 札の辻へ(元町1丁目会所前)

かわせが続き、囃子の調子もゆったりとした調子のものからテンポが上がり、踊り手の舞い姿も一段と迫力を増す。

寛永15年(1638)の川越大火からの復興の際に拡張された(旧町名で)本町、高沢町、喜多町、南町、江戸町などの通りは10メートル前後の道幅を持ち、山車の相互運行を可能にした。また、川越祭りでもっとも盛り上がるのは、東西の線と南北の線が交差する四辻であり、城下唯一の四つ角であった札の辻に加え、昭和8年以降は、仲町以南の中央通り開通によって、新たに仲町と連雀町、本川越駅前の辻が加わった。この中央通り沿いではその年の出番のない山車持ち町内や山車への乗り込みのない囃子連が居囃子のための櫓を組んだり、商店が顧客のための棧敷、あるいは仮設の飲食屋台を組み、行き交う山車との間で曳っかわせを行い、祭りを盛りたてている。

札の辻を渡り山車を止める。宰領の指図を受けた先触れ方が、町内の会所へ「わたり」をつけに走っていく。わたりを受けた町内の会所では案内役が金棒をもって町の境まで出迎え、山車はその町を出るまで先導し案内する仕来りである。これを済ませると、蔵造りの町並み、一番街の練行である。電線類が地中化された一番街では、それまでしまわれていた上勾欄と鉾を上げ、さらに人形もいっぱいに取り上げて、江戸型の山車本来の姿で曳くことができる。川越の蔵造りのルーツである川越大火前創建の重要文化財大沢家住宅(寛永4年(1792))、大火後にいち早く建ち上がった蔵造り資料館(明治27年(1893))と過ぎると左手には時の鐘(明治27年)が見える。伝建地区のシンボルゾーンである蔵造りの町並みも、江戸の昔を再現したような祭礼模様で、この時ばかりは山車に主役を譲る格好である。



仲町交差点の様子

蔵造りの町並みのゲートともいえる人気の辻、仲町交差点にさしかかると、「曳っかわせ」の連続に混雑ぶりもかなりの様子である。その先の中央通りも、居囃子を演ずる棧敷との間で曳っかわせが行われ、人の波がどよめいている。仲町の辻での曳っかわせを済ませ、会所に向けて帰路につく。

夜間練行に備えて、唐破風と勾欄まわりに飾り付けた提灯に明かりが入ると、きらびやかな山車の表情は一段とまばゆくなる。山車の名前を書きこんだ二組の高張り提灯が人目をひく。やがて午後6時30分、鳶頭の本遣りにつづいて山車の舞台で囃子が始まる。天狐が頭を切り白髪が宙に舞う。拍子木が二つ鳴って山車がゆっくりと動き出す。仲町の辻では曳っかわせが始まる。山車の舞台が回転するごとに、大歓声があがり提灯が乱舞する。防火の町ならではの道幅と、それに見合う見栄えを備えた川越商人の英知の結集である蔵造りの町並みと、町衆の心意気を表出したかのような川越祭りの山車が織りなす光景は、川越の魅力を細大漏らさず現出する。曳っかわせの場面に出くわすと観客は身動き一つできない程の状態になる。山車を先に見送って、後ろから追いかけてながら山車の姿と町並みを眺めるのも乙な楽しみ方である。喜多町から川越駅までの通り両側には、食べ物や玩具などの露

店が出て賑わう。植木市が立つ横丁もある。蓮馨寺境内では、見世物小屋やお化け屋敷が小屋掛けしており独特の雰囲気をかもしだしている。曳っかわせの場面を少し外れて、川越商工会議所（昭和2年）の角から大正浪漫夢通りに入り、露店をひやかしながら、立門前を曲がり、蓮馨寺境内へと人混みを行くのも川越祭りならではの光景である。

夜も更けてくると、川越八幡宮の氏子など駅周辺の山車は、連雀町から本川越駅あたりに集結し、氷川神社の十カ町の山車が北へと戻ってくる。祭りはやがて終幕近く、札の辻、仲町と最後の曳っかわせを演じた各町の山車が帰路をたどり、それぞれの町内で納めに入る。午後10時、無事に小屋に入った山車の前で納めの儀式が始まる。朝から流れつづけていた囃子が止まり、あたりが静寂につつまれる。自治会長、祭礼実行組織の会長挨拶につづき、山車練行の指揮をとった宰領から拍子木と責任者のタス

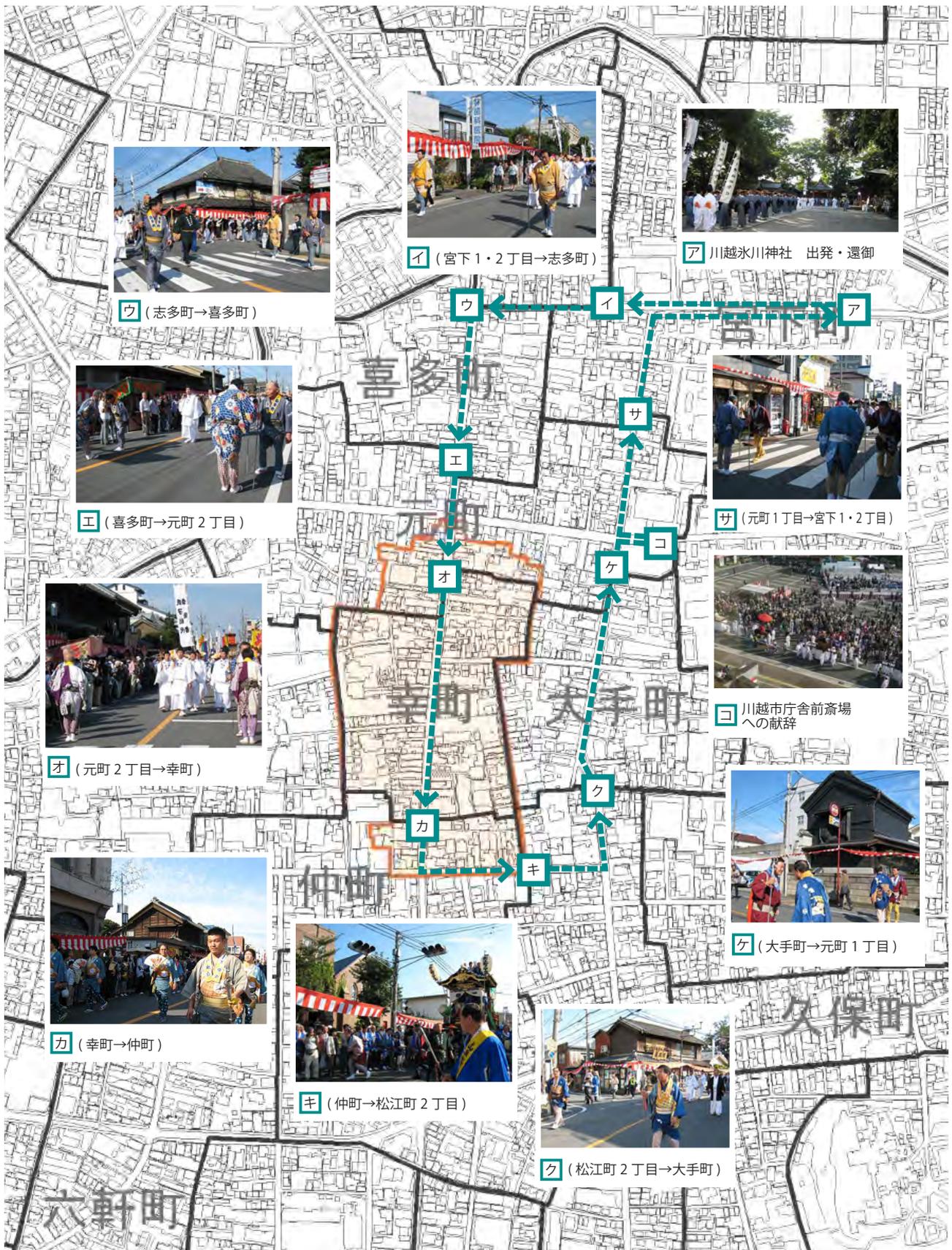
キが返還される。つぎに鳶頭の木遣りと参列者一同による手締めで町内の繁栄を祈念し、囃子連の納め囃子となる。曲目は「屋台」、舞うのは天狐。このときまで右手に持っていた二本の幣束を、はじめて両手に分けて持ち頭上に掲げる所作をみせる。この天狐の舞は、山車に天降った神が昇天していく様をあらわしている。最後に全員による万歳三唱でしめくくりとなる。先程までの喧噪や熱気とは裏腹に、蔵の家並みをわたっていく風はもう晩秋の気配である。



2日目 21:00 曳っかわせのクライマックス



時の鐘と蔵造りの町並みを練行する川越祭りの山車



神幸祭 運行ルート (先導役引き継ぎの様子)

					
幸町(県)	喜多町(県)	元町二丁目(県)	大手町(県)	幸町(県)	仲町(県)
翁の山車	秀郷の山車	山王の山車	鉦女の山車	小狐丸(小鍛冶)の山車	羅陵王の山車
					
松江町二丁目(県)	志多町(県)	六軒町(県)	今成(県)	松江町一丁目(市)	元町一丁目(歴)
浦嶋の山車	弁慶の山車	三番叟の山車	鉦女の山車	龍神の山車	牛若丸の山車
					
宮下町(歴)	末広町(歴)	連雀町(歴)	中原町(歴)	三久保町(歴)	西小仙波町(歴)
日本武尊の山車	高砂の山車	道灌の山車	重頼の山車	頼光の山車	素戔鳴尊の山車
					
脇田町	通町	新富町二丁目	新富町一丁目	野田五町	仙波町
家康の山車	鍾馗の山車	鏡獅子の山車	家光の山車	八幡太郎の山車	仙波二郎の山車
					
岸町二丁目	菅原町	南通町	旭町三丁目	川越市	
木花咲耶姫の山車	菅原道眞の山車	一本柱万度型の山車	信綱の山車	狸々の山車	

(県) …県指定有形民俗文化財 (市) …市指定有形民俗文化財 (歴) …川越市登録歴史文化伝承山車
川越氷川祭山車一覧

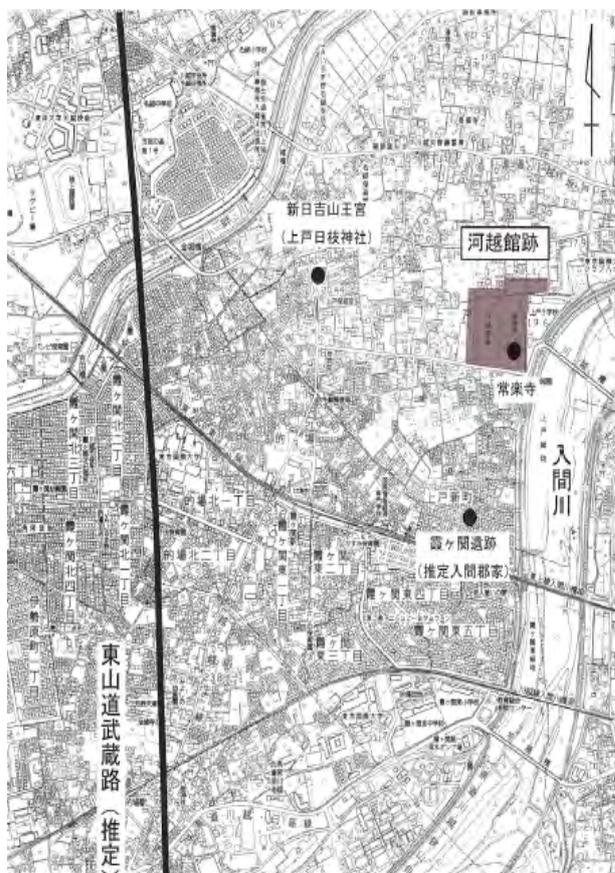
2 「物資の集散」にみる歴史的風致

(1) 物資の集散の歴史

川越市の名称は、12世紀後半、現在の川越市上戸・鯨井地域に居館を構えた河越氏を由来とする。河越館跡の南方には、古代の入間郡役所である「入間郡家^{いるまぐうけ}」があったとされる。入間川に接するこの地域では、正倉に納める税である稲穂は、入間川の水運を利用し、入間郡内から集められたと考えられる。西には古代の官道である「東山道武蔵路」が南北に走っており、発掘される遺物等により、その後もほぼ同ルートの「鎌倉街道」が使われ、引き続き水陸両面から交通の要衝として、物流システムが機能していたことがわかる。

川越の物資の集散地としての性格は江戸時代に発揮される。川越藩の繁栄を支えたのは、城下町商業の興隆にある。既に後北条氏の時代に定期市が開かれ、江戸時代に入っても継続し、商業の中心を担っていた。毎月2・6・9のつく日に開かれる九斎市は、江戸町・本町・南町・喜多町・高沢町の上五カ町が順番に開催していたが、後に上松江町にも4の日の三斎市ができ、川越では月に12日も市がたつようになった。やがて常設の店舗による見世売りが広く行われてくると定期市は衰退し、見世売りが城下町商業の中心となった。こうして川越は地方経済の中心としての地位を確立した。江戸と川越を結ぶ新河岸川舟運が開かれると江戸への物資の供給地として、その繁栄はゆるぎないものとなった。

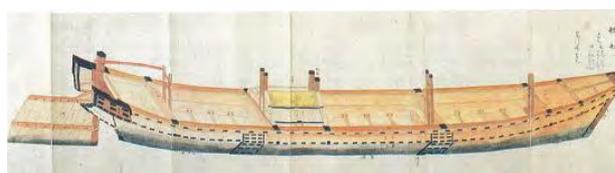
新河岸川の舟運は、寛永15年(1638)、仙波東照宮が大火のため焼失し、その再建資材を江戸から新河岸川を利用して運んだことに始まる。それは同時に江戸との流通機関の整備であり、当時新田の開発途上にあっ



上戸・鯨井地域の主な遺跡
川越市立博物館「第34回企画展よみがえる河越館跡」展示図録



仙波東照宮 本殿



川越ひらた（「河船艦」より）船の科学館蔵



新河岸川・荒川の河岸場分布

た川越藩の農業生産力を増大させるきっかけともなった。藩主松平信綱は、領内の伊佐沼から流れる川に多くの屈曲をつけ、舟の運行に適するよう水量保持の工事を施した。流域の川越五河岸と呼ばれた扇、上・下新河岸、牛子、寺尾や福岡、古市場には次々と河岸問屋ができ、営業を始めた。また、荒川沿いにある老袋、蔵根といった河岸場も同様であった。扱う荷物の種類も川越藩御用物以外に、川越商人や周辺に住む農民たちの需要と供給にこたえた荷物に代わっていく、と同時に乗客の需要もましていった。舟の形は普通「高瀬舟」で70～80石積み、川越方面からは俵物（米、麦、穀物）、さつま芋や農産物を運び、江戸からは肥料類をはじめ、主に日用雑貨品を運搬した。

また、寛永12年(1635)に参勤交代制の開始により整備が始まった川越街道の整備も信綱によって手がけられた。川越街道には、大井宿を含む六つの宿駅が定められ、伝馬や助郷の制度が整えられた。この街道を主軸として、川越浦和道、川越上尾道、熊谷往還、川越秩父道、川越越生道、川越八王子道、川越所沢道などは元禄はじめ頃から利用が盛んになった。さらに、舟運との関係から、新河岸から青梅など西へ向かう河岸道と呼ばれる道も整備された。川越と江戸の連絡を円滑化する水路・陸路の整備によって、川越は江戸の台所を支える重要

な物資の供給拠点になるとともに、人と物の交流により、小江戸と呼ばれるほどの繁栄を築くことになる。

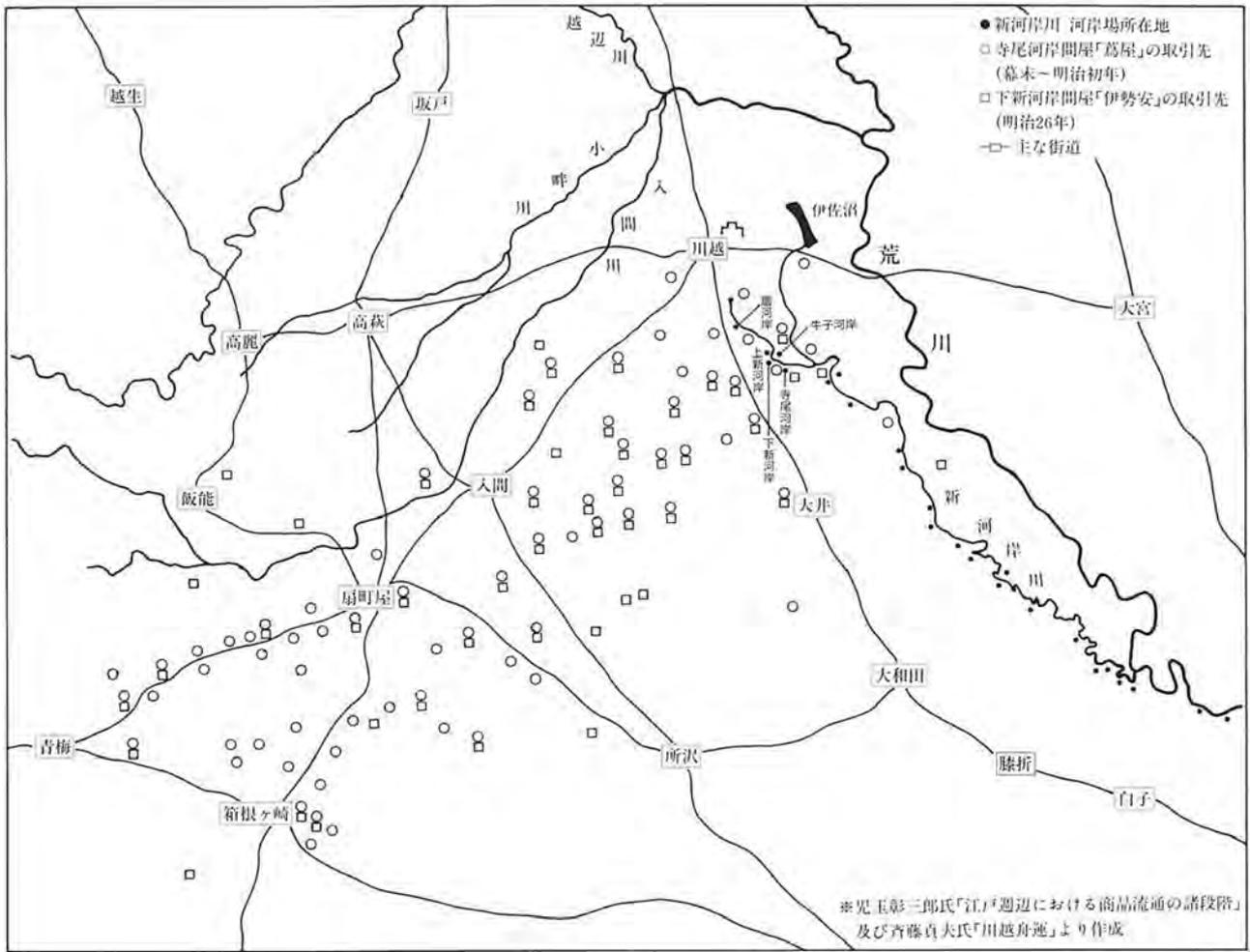
現在の新河岸川沿いでは、下新河岸の河岸場跡が市指定史跡となっており、市指定文化財である「伊勢安」(齊藤家)の素麵蔵、米蔵、味噌蔵をはじめとする河岸問屋時代の建造物に河岸の繁栄の姿を垣間見ることができる。また、かつて川に堂塔を向けた「蓮光寺」は、虹梁の豪壮さと緻密さを併せ持つ、



齊藤家(伊勢安)土蔵



蓮光寺総門



河岸問屋の取引先関係図
 川越市立博物館常設展示図録

	文化3年(1806)	天保4年(1833)	嘉永4年(1851)	明治2年(1869)	明治13年(1880)
上り荷物 (江戸・東京より川越へ)	油、綿、太物(綿織物)、砂糖、天草、生麩、藍玉、酒酢、瀬戸物、小間物、荒物、鉄類、塩類、石新川物(鯉節)、藍紙、綿、干鰯、塩、石	油、綿、太物、砂糖、天草、塩類、生麩、藍玉、酒酢、石新川物、荒物、小間物、瀬戸物、鉄類、藍紙、干鰯、糖、塩、石	油、綿、太物、砂糖、酒酢、小間物、荒物、瀬戸物、鉄類、塩類、藍紙、糖、干鰯、木炭、塩、しょう油・油あき樽、石、土釜灰瓦	油、綿、太物、砂糖、酒酢、塩類、藍紙、石、塩、しょう油あき樽、糖、葛西灰、東京灰	油、砂糖、藍玉、糖、干鰯、木炭、油粕、瀬戸物、荒物、鉄類、釜石、塩、米穀、石、酒酢、魚類、藍紙、茶葉、酒・しょう油あき樽、むしろ、灰、米類
下り荷物 (川越より江戸・東京へ)	債物(米、麦、雑穀類)、油粕、鰯実、しょう油、鎌片山(ござの一種)、炭、そうめん、板賣、杉皮、石灰、屋根板、鍛冶炭	債物、しょう油、油粕、鰯実、鎌片山、そうめん、炭、松板、杉板、松、小賣、中賣類、杉皮、杉戸、椰子、屋根板、半戸、石灰、鍛冶炭	債物、しょう油、油粕、鰯実、鎌片山、そうめん、松板、杉板、小賣、中賣、杉皮、炭、松、杉戸、椰子、屋根板、半戸、石灰、鍛冶炭、青梅炭、水油・魚油あき樽、拍皮	債物、しょう油、油類、板類、杉皮、そうめん、鍛冶炭、青梅炭	米穀、しょう油、甘藷、里芋、石灰、炭、土釜灰、青梅炭、材木類、屋根板、下駄歯、陶器土

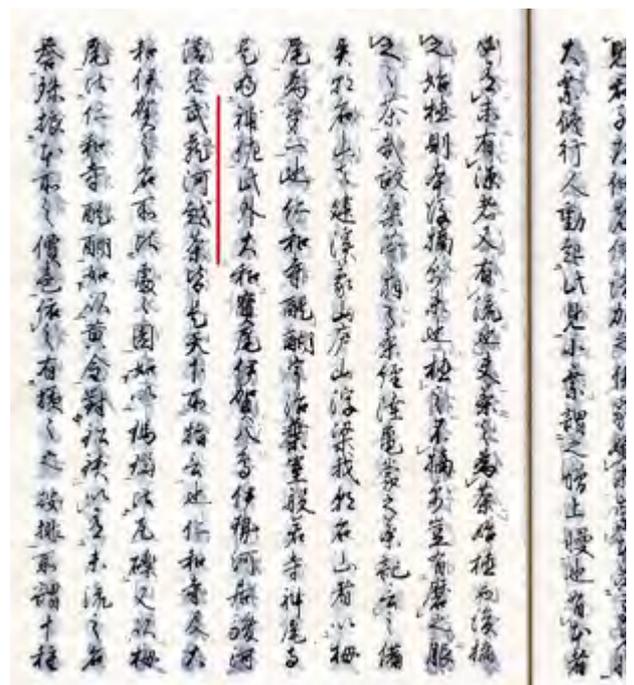
運賃表による船積み荷物の変遷
 川越市立博物館常設展示図録

彫刻や曲線造形に特徴のある江戸時代後期の総門（市指定文化財）を残し、往時を偲ばせる。一方、街道筋では、それぞれ街道の基点に近い位置に町家や旅館建築、洋館などが点在している。旧八王子街道におけるランドマークになる旧六軒町郵便局（カワモク本部事務所棟）の洋館、旧所沢街道（新富町商店街）にゲートの的に面する牛窪家の町家と向かい合う旧鏡山酒造（登録有形文化財）の醸造蔵、旧浦和街道に面する森甚の町家などが、現在も都市景観重要建築物や景観重要建造物として、地区の歴史的シンボルとなっている。

松平家に代わって元禄7年（1694）柳沢吉保が藩主についた時期以降、川越の経済は大きく変わっていった。それは、幕政の中心地江戸が大発展を遂げ、元禄期に人口100万人を超える巨大都市に成長し、その消費人口を支える各種物資を、従来の上方から、江戸を取り巻く関東各地に求めはじめたことによる。つまり江戸地回り経済圏の成立であり、江戸送りのために生産物を集荷し、江戸からの商品を配給する機能をもつ在郷町が圏内の各地に成立するなかで、江戸に一番近い城下町である川越が、その中心的な役割を担ったのである。大麦・小麦・小豆・粟・芋・辛子・胡麻・魚油・薪・石灰・綿などは江戸地回りで供給されるようになった。商品生産と流通構造が発達した近世後期になると、量あるいは質において、醤油や素麺、河越茶（狭山茶）のように上方の商品と競えるものも出てくるようになった。

入間郡西部の狭山丘陵に由来する狭山茶の名称の起りはそう古くはない。明治8年（1875）に狭山会社が創立されて以後、狭山茶の名称が産地とともに定着するようになる。「河越茶」については文献の上では「除

睡鈔」や「異制庭訓往来」に出てくる。南北朝時代に成立した「異制庭訓往来」には、茶の産地としては武蔵以北では唯一、日本五場のひとつとして「武蔵河越」の名が記されている。平安時代の初頭に最澄が江州坂本に茶の木を植えたということと、最澄の高弟である円仁が川越の無量寿寺（中院・喜多院）の草創者と伝えられることには茶の木の普及と深い関わりがあるものとされる。すなわち茶の木の普及は主として僧侶の手によってなされたことが明らかであり、河越の茶は無量寿寺を通じて各地に伝播されたと推測できる。またもう一方で、河越茶の起源とされるものに上戸の日枝神社（もと新日吉山王権現）と河越氏がある。当時鎌倉幕府を通じて京都の公家達や宋から帰国した僧栄西の影響を受けた河越氏が、茶の伝播に関係があったとされる。入間川の舟運とともに古くからの交通の要衝であり、河越の地味が茶樹に適したことにより栽培され、上戸・鯨井地域は銘茶を全国に向けて発信する場所でもあった。河越館跡の史



異制庭訓往来（「群書類従」第四十巻所収）
延文から応安年間（1356～75）成立 天和3年（1683）刊行
入間市博物館蔵

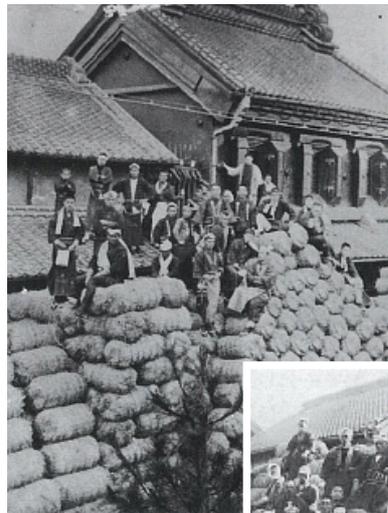
跡公園では、茶の種を日本における茶発祥の地である京都柵尾と滋賀県日吉大社に求め栽培している。近くで茶園を経営する「鈴木茶園」は河越茶の流れを汲む在来種の栽培をおこなっており、茶畑から臨む長屋門（景観重要建造物）が往時を偲ばせる。

川越は、江戸時代から米穀・織物取引を中心に商業都市として栄えてきたが、この近世の商品流通の構造は、明治に受け継がれる。明治11年（1878）には、県内初の国立銀行となる第八十五国立銀行が開業する。また、明治26年取引所法が公布されると、翌年には本町（現元町1丁目）に米穀取引所が設立された。その後、米穀取引の中心は志義町（現仲町から松江町2丁目）に移り、周辺には十数軒の米穀問屋が集中し、現物取引を中心として、2・6・9のつく日に月9回の定期的な取引が行われた。市日には周辺の農家からの米を運ぶ荷車で大変な賑わいであった。なかでも「足立屋」（原田家住宅）は大阪堂島の米相場を動かしたともいわれる穀物問屋であった。このような活況を呈した志義町と猪鼻通り（現大正浪漫夢通り）との角に武州銀行川越支店が、川越街道の立門前との交差点近くには埼玉農工銀行川越支店が昭和2年開業した。米穀市は第二次世界大戦による物資統制が行われる昭和10年代後半まで続いた。旧志義町界限には、米穀市で賑わった往時を偲ばせる町並みが現在も残る。

川越地方は、江戸時代から斜子織、唐棧織などの織物の集散地として知られていた。機業の中心は綿業で、初めは輸入綿糸を使用していたが、明治になってからは国内紡績糸も原材料として利用するようになり、生産高は急速に増え、多種類の織物が生産された。主な製品は、双子、京棧留、瓦斯織、飛白織^{かすり}だった。織物の取引は、初め各仲買



鈴木茶園（上戸）



足立屋（原田家住宅）
明治35年頃



小島米穀店 明治35年頃



足立屋（原田家住宅）

商人の店舗で行われていたが、明治43年（1910）に2棟の長屋建ての町家が向かい合う形状の川越織物市場が開設されると、5・10のつく日に月6回の定期市が開かれ活況を呈した。また、織物市場に隣接する場所に栄養食配給所がある。ここでは、主に中小製糸工場の労働者のために朝、昼、夜の3回食事を配達したもので、昭和9年から昭和20年まで活動した。当時川越の織物産業は、出機と呼ばれる元機屋制生産から近代的機業への脱却が模索されており、近代的織物工場で働く労働者の待遇改善のために設置された。室内には当時の土間と釜場が残る。織物市場の建物とともに市指定文化財に指定されている。

物資の集散地ゆえに物の流通とともに人の交流も行われる。行伝寺門前に位置する「山屋」は川越を代表する料亭である。行伝寺に向かい、左に土蔵を見ながら進むと堀に導かれるように前庭があり、その奥に二間幅のゆったりした玄関が見える。玄関からは広大な中庭の新緑や紅葉を、広間を通して望むことができる。中庭を囲むように数棟の建物が渡り廊下で繋がっている。山

屋は江戸後期に川越の豪商横田五郎兵衛の別邸として建てられた屋敷を引継ぎ、明治初頭より料亭として営まれている。通りに面した主屋と土蔵が、伝統的建造物に特定されている。川越は大正11年（1922）に県下初の市制が施行され、埼玉の商業の中心地となり、花柳界の賑わいも県下随一であった。昭和5年（1930）霞ヶ関カンツリー倶楽部（笠幡地域）が開設され、山屋は当初クラブ内の食堂の出張経営にもあたった。当時のゴルフ場の数は極めて少ないなかで、わが国で初めて36ホールを持つ名門ゴルフ場として、皇族をはじめ、会員も著名人が顔を揃えた。ゴルフ帰りに山屋に立ち寄り、料理を賞味するといったコースは現在も続いており、東京の奥座敷といった風情である。こうした奥向きの役割は川越の一面を特徴づけるものであり、入間川河畔などで行われた陸軍演習や周辺基地を訪れる皇族の宿泊場所として、山屋や佐久間旅館（登録有形文化財）、初音屋（景観重要建造物）などの料亭・旅館に限らず、亀屋の旧山崎家別邸や大店の離れ座敷などが迎賓の役割を担っていたのである。



明治43年頃の川越織物市場



山屋

(2) 集散地川越の歴史的風致

明治元年（1868）に川越藩より新政府に出された文書に「周防守領分武州川越之儀者、諸穀物織物類ヲ始数多國産御座候」とあり、近世より周辺に豊沃な農村をひかえ、穀物や織物を始め、江戸との交易を通して、県内第一の先進商業都市として発展した様子がかがえる。かつて、周辺農村から物資を荷車で運びこむ人々のために、安価なうどんや団子の店が開かれ、四門前を含め穀市・織物市の近くには、現在に続く、菓子店、茶店、うなぎ屋、料亭、醤油醸造、その他の老舗が開かれ、時代の変化を許容しつつも、現在に受け継がれている。

仲町通りに面して、古くから茶商を営んでいる「亀屋山崎茶店(通称「お茶亀屋」)」(山崎家住宅)からは、重厚なガラス戸から覗く奥の棚に大きな茶筒が並び、いかにも茶の老舗たる風格が伝わる。明治10年(1877)創業になるお茶亀屋は、現在は小売りが主体だが、かつては焙煎も行っていた。江戸時代に蒸し製煎茶の製法を導入し、江戸で取り引きされると、狭山茶(河越茶)は他産地にも増して繁栄し、横浜開港と同時にいち早く海外に輸出された。お茶亀屋には英語表記の当時のお茶箱が残る。山崎家の建物は、大火を教訓とし、中庭を中心として外側は必ず土壁か土戸で閉じられる綿密な防火体制を構築しており、その完成度は非常に高い。明治38年(1905)建築の店蔵は、現存する蔵造り商家の中でも最大規模のものである。明治26年の大火から10年以上を経過するなか、京風の繊細な格子と京都からわざわざ取り寄せた一文字瓦をあしらった瀟洒な蔵造りであり、袖蔵とレンガ造りのゲートからなる外観の構成は、川越の蔵造りの洗練度の高さを物語っている。敷地内の建造物は全てが市指定文化財、も

しくは伝統的建造物に特定されている。

庶民のあいだに茶が普及するとともに、菓子づくりも盛んになる。川越には和菓子の老舗が多く、それぞれ趣向を凝らした菓子づくりをおこなってきた。また、城下町ゆえの茶道の興隆もあり、和菓子の研究には情熱が注がれてきた。

「亀屋(通称「もち亀屋」)」(山崎家住宅)は天明3年(1783)創業、川越では一番の老舗である。一番街に面する店蔵(市指定文化財)は、明治26年(1893)の大火後すぐに着工された川越で最も完成度の高い蔵造りであり、仲町交差点角に向かい合う元砂糖問屋の松崎家住宅(明治34年(1901)建築、市指定文化財)とともに伝建地区のゲートの建物である。高い箱棟・出桁・二重の軒蛇腹・目塗台と相俟って、開ききった際に隣接する扉と噛み合う精緻な観音開扉や、下屋の内側の壁には当時の磨き漆喰の光沢が残り、破風に刻まれた刀型の漆喰細工などに、職人の抜きんできた技術力を見ることができる。店蔵北側の袖蔵は防火に備えると同時に外観上の意匠バランスを考慮した姿である。奥に並ぶ江戸後期から大



お茶亀屋(山崎家住宅)

正初期にかけての土蔵群と蔵座敷の屋根の連なる様も壮観である。

川越の菓子を語るうえで忘れてはならないのが芋菓子である。川越芋（さつまいも）の産地は武蔵野台地の川越藩領の村むらとそれに隣接する他領の村むらで、その発祥地は南永井村（現所沢市）であった。その名主、吉田弥右衛門が寛延4年（1751）に甘藷の試作に成功し、近隣に広めた。それは初め農家の自家用であったが、やがて江戸向けの商品作物になった。寛政年間（1789～1801）に江戸に初めて焼き芋屋が現れ

た。川越地方の甘藷は、その焼き芋屋用のイモとして発展したもので、天保期（1830～44）には「本場もの」とされ、ブランド芋になった。明治28年（1895）に川越鉄道が開通し、川越と中央線の国分寺が結ばれると、東京方面などから川越にくる人が増えた。そこで川越の有志が競って川越ならではののみやげ品の開発を試みた。そのなかでもものになり、いまでも名物になっているのが「芋せんべい」である。川越ではこうして早くから芋菓子の製造・販売が始まった。最近はその伝統にあやかり、芋菓子を



芋せんべいの開発にも率先して力を注いだ亀屋



2階に「芋菓子の歴史館」を設ける亀屋米泉



芋せんべいは、薄切りにしたさつまいもを鉄板の上に並べてゆっくり焼き上げる
東洋堂ホームページより



川越芋の販売先だった江戸の焼き芋屋の情景を忍べる広重の版画
川越市立博物館蔵

扱う店数も芋菓子の種類も年々増えつづけ、今では自他共に認める日本一の芋菓子の町になっている。

明治中期創業の「亀屋栄泉」（明治26年大火後建築、伝統的建造物）は、長喜院門前角にある。奥の工場では、今も京菓子や芋菓子がつくられている。2階の資料館には和菓子の押型が保存されている。

川越には、太平洋戦争前には多くの醤油醸造元があった。享和元年（1801）の川越の地誌、「武蔵三芳野名勝図会」には、川越の名物のひとつとして醤油があげられている。川越は良質な小麦の生産地であり、地下水にも恵まれていた。寺町通り（旧行伝寺門前）を南に向かい、仲町通りの手前、「松本醤油」の店蔵近くまで来ると醪もろみの匂いが香り立つ。江戸後期創業の横田屋醤油店から明治22年（1889）に松本家が醤油醸造業を受け継ぎ現在に至っている。市の指定文化財である店蔵は、江戸末期の建物と推定されており、その外壁は川越では数少ない白漆喰仕上げである。窓形式も大火後に多用された観音開形式ではなく、片引きの土戸を入れる形式で、川越の古い型の蔵造りと推測される。敷地最奥部に建つ天保期の仕込蔵は景観重要建造物に指定されている。蔵付き酵母による天然醸造とともに、大豆など川越産の材料及び水による地産地消とすることもこだわりの一つである。また、川越の銘酒として親しまれた鏡山酒造が平成12年に惜しまれつつも廃業した。それから6年の時を経て、伝統ある銘酒「鏡山」の復刻・生産に取り組んでいる。

物資の集散地川越の繁栄を伝える建造物は、業種転換を図りながらも、まちのそこかしこに存在する。大別すると、蔵造りをはじめとする町家と近代洋風建築がある。かつて穀市で賑わった仲町通り（旧志義町）

で、米穀問屋を前身にもつ建造物としては、川越一番の上背をもち、三連の観音開きに特徴がある市指定文化財の原田家住宅（明治30年（1897）建築）の蔵造りをはじめ、伝統的建造物である旧笠間支店の蔵造り、旧長谷川商店の町家などがある。

また、川越街道に面しては、松江町2丁目（旧上松江町）に小島家（都市景観重要建築物）、中島家（景観重要建造物）の真壁造り町家が、旧同心町通りの榎本家（景観重要建造物）も米穀問屋を前身にもつ建物



旧武州銀行川越支店（現川越商工会議所）



旧埼玉農工銀行川越支店

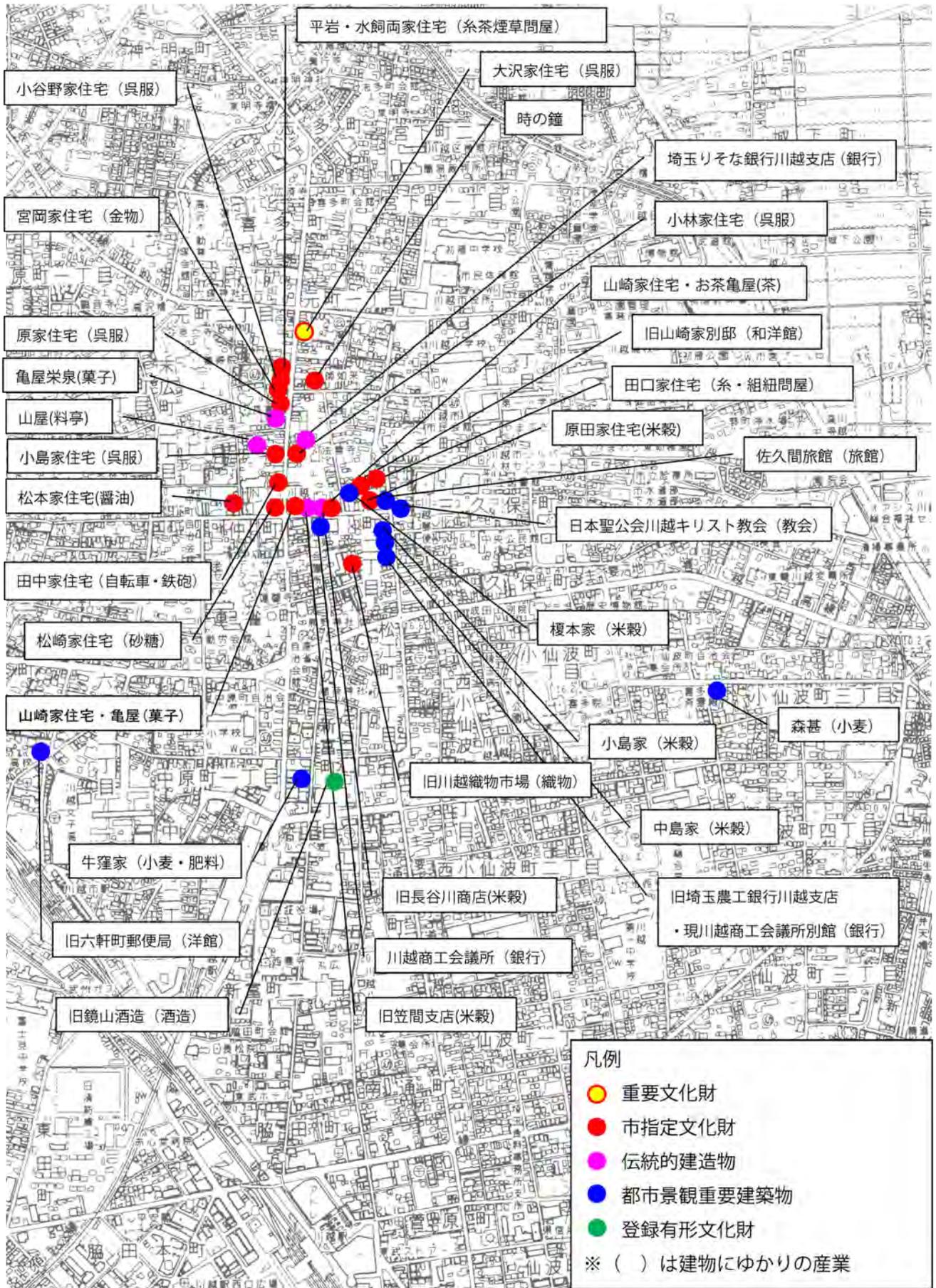
である。このほか、喜多町にも江戸期からの町家を残している。当時の繁栄ゆえに出店した銀行建築には、旧武州銀行川越支店と旧埼玉農工銀行川越支店がある。「旧武州銀行川越支店」（登録有形文化財・都市景観重要建築物）は、前田健二郎の設計によるギリシャ神殿風の列柱が特徴的な昭和2年建築の建物で、クラシックリバイバルの外観をよく残している。現在は川越商工会議所となり、川越経済界の商工業の中心的役割を担っている。「旧埼玉農工銀行川越支店」（都市景観重要建築物）は、F.L. ライトの影響を色濃く伝える昭和2年建築の銀行建築であり、現役のオフィスビルとして保険会社で使用している。松江町2丁目の交差点、東の突き当たりには大正10年（1921）建築の「日本聖公会川越キリスト教会礼拝堂」（登録有形文化財、景観重要建造物）が市内唯一のレンガ造建築としてアイストップになっている。また、交差点向かいには、「佐久間旅館」がある。乗合馬車の休憩所から起こり、明治27年に旅館を創業。島崎藤村をはじめとして多くの文化人も愛用した明治44年（1911）建築の奥の間（登録有形文化財、景観重要建造物）は川越屈指の奥座敷である。この敷地北側には、保岡勝也の設計になる和館洋館の構成をとる亀屋の瀟洒な別邸建築、「旧山崎家別邸」（大正14年建築、市指定文化財）がある。

織物に関する店舗も数多い。呉服太物商を前身にもつ建物としては、重要文化財の大沢家住宅をはじめとして、原家住宅（やまわ）、小谷野家住宅（フカゼン）、小島家住宅（相徳）、小林家住宅などがあり、平岩・水飼両家住宅は糸繭製茶煙草問屋、田口家住宅は糸・組紐問屋を前身にもつ（すべて市指定文化財）。大沢家住宅は寛政4年（1792）の建築で、明治26年の大火に焼け

残り、川越商人に蔵造りを建てさせるきっかけとなった建物であり、また土蔵造りが定型化する以前の様式を伝える建物として貴重である。「原田家住宅」（旧足立屋）は大火直後の明治27年（1894）に上棟され、長喜院門前との角店として、入母屋造の屋根が際立つ蔵造り。「小谷野家住宅」（旧山仁）は明治28年に上棟され、2階の開口を大きくとるために両側の庇上に袖壁を立ち上げた独特の意匠をもつ。この2軒に挟まれる「宮岡家住宅」（まちかん）は天保期から続く金物商で、明治30年（1897）の上棟になる。先に建つ2軒より棟高とし、高い箱棟、巨大な影盛、重厚な観音開扉など、川越の蔵造りの特徴を余すところなく伝える建物である。この3軒の蔵造りの並ぶ様は川越一番の見所となっている。そして往時の繁栄を象徴する建物としては、「旧八十五銀行本店本館」（埼玉りそな銀行川越支店）がある。この建物は、八角形のドーム屋根



旧八十五銀行本店本館（現埼玉りそな銀行）



集散地川越を物語る建造物の分布図

をもち、サラセン模様をあしらったネオルネッサンス様式を採り入れながらも、大正7年（1918）に、当時最先端の鉄骨鉄筋コンクリート造で建てられた。国登録有形文化財として、時の鐘とともに伝建地区のシンボルとして親しまれている。

なお、昭和5年発行の大塚巧芸社の緑草会（柳田国男、今和次郎など）編「民家図集」のなかには、「時の鐘」と「蔵造りの町並み」が紹介され、既に昭和初期から歴史的建造物としての位置づけを得ていたことは大変興味深い。

現存する「時の鐘」（市指定文化財）は明治26年の大火後に、町の3分の1が焼失した中で、自らの店も住まいも再建していない川越商人達によって、真っ先に建て直され、江戸時代の姿そのままに再現されたものであり、木造3層のやぐらで高さは約16メートルである。寛永年間（1627～34）に当時の川越藩主だった酒井忠勝によって創建されたといわれ、その後承応2年（1653）松平信綱が再建している。銅鐘もその都度川越の鋳物師により鋳造されてきた。時の鐘は江戸時代初期から城下の町に時を告げ、庶民に親しまれてきた鐘撞堂（時鳴鐘）であり、火の見櫓でもあった。この鐘楼下にある薬師神社はかつて市が盛んであった頃には、川越の市場神であったともいわれる。時代が変わり鐘つきの方法が鐘つき守りから機械仕掛けへと変化しても、午前6時・正午・午後3時・午後6時の1日4回鳴る鐘の音は、そのときどきの街の風景とともに趣をかえ、川越情緒を漂わせている。蔵造り商家の藪の中にそびえ立つ時の鐘は、物資の集散で栄えた川越町分十カ町の中心に位置し、四方に時報を告げる市民生活の拠り所として、また大火からの復興のシンボルとして、名実ともに川越の歴史を象徴する建物である。

物資の集散地としての川越は、舟運や鉄道輸送からトラック輸送に変わっても、ターミナルの要素は変わらずに機能し、モノとヒトが集まる都市となっている。かつての米穀・織物という2大産業からは業態が変化しつつも、集散地ならではの拠点性は持続され、埼玉県内有数の商業地として発展するなか、時代を象徴する様式の混在する歴史的建造物とともに、現代に至る様々な産業が渾然一体となり、川越ならではのまちを魅力づけている。



民家図集 昭和5年（1930）発行
緑草会編 大塚巧芸社



時の鐘

3 「寺社門前の賑わい」にみる歴史的風致

古くから人の住むところとなり、中世から武士が台頭し、近世の城下町を起源とする川越市には、長い歴史を背景とした数多くの社寺が市民生活の文化的シンボルとして存在し、門前の賑わいを今に伝えてきた。星野山無量寿寺、蓮馨寺、妙養寺、行伝寺、養寿院等は古くからある寺院で、中世には高名な僧侶もでている。なかでも無量寿寺の子院のひとつであった喜多院（北院）は、慶長年間に天海が住職となり徳川家康の信任を得て大寺となった。

(1) 喜多院界隈における歴史的風致

川越市街地の東側にこんもりと老杉に覆われた森に「喜多院」はある。天正18年(1590)、三河から関東に移り、江戸を居城とした徳川家康は、関ヶ原の戦いの後、覇権が確立されると、県内の後北条時代の城のうち、川越・岩槻・忍の3城のみを重臣の居城として残した。慶長10年(1605)に將軍職を秀忠に譲り、自らは大御所となるが、この頃から元和元年(1615)まで川越方面には毎年のように、鷹狩に訪れていることが徳川御実紀の記録から確認できる。鷹狩は単なる娯楽ではなく、軍事訓練や民情の視察という目的もあり、家康が江戸周

辺地域の治安に注意を払うなか、川越を重視していたことが読み取れる。慶長16年の遊獵では、狩場で天海と会見し、寺料の寄進を約束している。また、慶長18年の遊獵では、喜多院で天海に会い、天台宗の論義を聴聞した。三代將軍家光もたびたび川越を訪れ、川越城への御成も多い。この時代の藩主酒井家との親密さをうかがい知ることができ、また、家光は天海を慈父の如く慕っていたともいわれる。

「星野山無量寿寺」は、平安初期の天長7年(830)に、天台宗2代目座主慈覚大師円仁の建立と伝わる。13世紀末には尊海和尚が兵火により廃絶した無量寿寺を再興し、談義所として仏地院(のちの中院)、仏蔵院(のちの喜多院)、地藏院(のちの南院)を建てた。その後、多くの子院が建ち、中世には無量寿



喜多院境内

江戸図屏風

「江戸図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)は、江戸市街とその周辺の様子を描いた六曲一双の屏風であり、三代將軍徳川家光の数々の事蹟を描き込んだ追慕・記念の屏風だといわれている。屏風には向かって左側に江戸の町並みと江戸城が、右側には川越城とその周辺が描かれている。川越城内には、左手に三芳野神社が、右手に城内の殿舎が配置されている。屏風の内容が家光との関連で選ばれていることを考え合わせると、川越が家光ときわめて深い関係を持っていたことが推察される。

江戸図屏風より川越城の部分



寺仏地院が関東天台宗総本山として権勢を誇っていたことは、正安3年(1301)勅願所たるべき口宣の写や慶長以前の多数の古文書の所蔵によって知られる。中院は、寛永15年(1638)の大火により現在の地に移動し、本堂は享保18年(1733)の再建となる。中院境内は市指定史跡となっている。

慶長4年(1599)喜多院の第27世住職となった天海は、徳川家康に深い学識を認められ、以後、秀忠・家光と3代の将軍に仕えた。慶長18年、家康は喜多院の天海に対して八か条の関東天台宗法度を下し、東叡山の山号を贈った。これにより喜多院は関東天台の総本山の地位を与えられた。寛永元年(1624)江戸近郊に寛永寺が建立され「東叡山」の山号がそこに移るまで、喜多院は関東本寺の地位を確保した。寛永の大火により山門を除く堂塔を焼失したため、江戸城紅葉山にあった慶長初期ごろの書院造を移築して再建されたのが、現在の客殿、書院、庫裏である。伝承によると客殿は「家光誕生之間」、書院は「春日局化粧之間」とされている。客殿は入母屋造で柿葺、書院は寄棟造に柿葺、庫裏は入母屋造に銅板葺の屋根形状が特徴であり、江戸城の建築様式を伝えるものとしても貴重である。この3棟のほか慈眼堂、鐘楼門、山門が重要文化財であり、番所、慈恵堂、多宝塔が県指定文化財、境内地及び川越藩主松平大和守家の廟所が市指定史跡となっている。

元和3年(1617)徳川家康の遺骸を久能山から日光に移葬の際、喜多院に逗留し、天海により供養された。その後寛永10年(1633)に「東照宮」が建てられたが、同15年の大火により全て灰燼に帰した。その後再建した本殿、瑞垣、唐門、拝殿及び幣殿、石鳥居、隨身門が重要文化財に指定されている。東照宮本殿(寛永17年(1640)建築)は、三間社流造・銅瓦葺で、朱塗りの外観



仙波東照宮本殿

に極彩色が施されている。本殿の周囲に巡らす瑞垣は延長30間の本瓦葺で透し塀、正面中央に唐門がある。この唐門は一間一戸の平唐門で銅瓦葺である。拝殿・幣殿は入母屋造・銅瓦葺、本殿同様に朱が施されている。境内入口にある隨身門は朱塗八脚門、切妻造で銅板葺である。

喜多院山門前には重要文化財の「日枝神社本殿」がある。かつては喜多院境内の一角だったが、昭和3年道路の新設に伴い分断された。慈覚大師が無量寿寺の創建に際し、比叡山坂本の日吉山王社を勧請したものといわれ、文明9年(1478)に太田道灌が江戸城の鎮守とするため、東京赤坂の日枝山王社に分祠したといわれる。

1月3日の喜多院初大師は「だるま市」が開かれる。現在は元日から初詣も多く、年初から参詣者で賑わう。境内にはダルマ納め所が設置され、赤い大小様々なダルマが山積みとなる。初大師大法要の歴史は、少なくとも江戸時代まで遡り、1月3日の慈恵大師の命日に御開帳があったという記録がある。(喜多院日鑑明和二年条)また、だるま市は川越氷川神社宮司山田衛居の日記である朝日之舎日記の明治16年(1883)2月10日(旧暦1月3日)の項に記載があることから、少なくとも明治初期まで遡ることができる。

2月の節分の日には、年男年女たちによる豆まきが盛大におこなわれ、近在はもとよ

り、遠方からも恒例のように訪れる人が多い。4月3日～5日は長日大護摩講がある。古くからの習慣で、川越付近の古い家はお札をもらいに来る。9月には植木市、11月初旬には菊花展が境内で開催される。

一方、「中院」には、島崎藤村の義母の墓所がある縁で、藤村が川越の義母のために建てた離れ座敷が移築されており、茶室として活用されている。お盆の時期には「法灯花」の行事があり、赤い花を模した蠟燭に火がともされ、普段非公開の奥庭も散策することができる。また、閑静で手入れの行き届いた庭に咲くしだれ桜は、喜多院のソメイヨシノに先駆けて満開を迎え、川越に春の訪れを伝える。中院から東照宮を経て、喜多院境内へと抜ける花見コースは川越一の桜の名所として賑わう。「武蔵三芳野名勝図会」では「星野一山、桜おほしと云へども、……暮春には、千条万枝艶花芬々として、



喜多院 だるま市の様子



喜多院 節分の様子

賽の貴賤、樹下に憩ふ。」と桜を愛でる様子を伝えている。一年を通して参詣者の絶えない、市民にとっての憩いのエリアである。

喜多院の西から北にかけての地区は、かつての茶屋街であり、粋をこらした楼家や料亭建築が今も残る。周囲を川に囲まれた川越では、川魚料理が名物だった。そのなかでも、うなぎの老舗は現在に引き継がれている。喜多院と成田山川越別院の間に在る「東屋」(明治初期創業)は大正14年(1925)の建築。杉皮葺の門から覗く左手の建物は元茶室である。かつては喜多院の湧水を引き込んだ池庭を囲んだ個室で、冬は掘り炬燵を囲める。大正11年建築の「てんぬま」はむくりの付いた入母屋造が特徴的な楼家を天麩羅料理店として活用している。同じく大正11年建築の洋食店「栄」は2階の手摺に黄色の色ガラスがあしらわれたハイカラな楼家である。重厚なむくり屋根と玄関が特徴的な「市村旅館」は昭和初期の建築。それぞれ都市景観重要建築物などに指定されている。

喜多院の北参道に隣接し、「川越のお不動様」と親しまれる成田山別院・本行院がある。縁日である毎月28日には蚤の市が建ち、古着や骨董品など露店が並び、境内は足の踏み場の無いほどの人混みとなる。門前にある「市野屋豆腐店」は明治43年(1910)創業の町家であり、隣接する「市野川家」は金属板で洋装を施した看板建築で、昭和初期の様相を伝えている。(双方とも都市景観重要建築物)

成田山が面する北の通りは久保町通りとなる。昭和3年に拡幅が行われ、それに合わせ昭和4年に竣工した町家や看板建築が町並みを特色づけている。なかでも細やかな幾何学模様を洗い出しモルタルであしらった看板建築の書店「福田屋」と「太田屋茶店」が路地を隔てて並び合う姿が印象的である。

もと、だんご店であった「森田屋」は伝統スタイルに昭和初期を反映したガラス窓が特徴的な町家である。それぞれ景観重要建造物等に指定されている。

また、日枝神社から東に向かう道路は、かつての川越浦和道であり、街道筋には景観

重要建造物に指定された「森甚」の町家をはじめ、蔵や洋館等が残る。喜多院界限には、城下町川越の町並みとは異なる門前ならではの賑わいが存在し、これら周辺の空間が喜多院の森と一体をなし、界限を形づくっている。



福田屋（景観重要建造物）



太田屋茶店
（都市景観重要建築物）



市野屋豆腐店
（都市景観重要建築物）



東屋（景観重要建造物）



米（都市景観重要建築物）



てんぬま
（景観重要建造物）



喜多院客殿（重要文化財）



喜多院 松平大和守家廟所
（市指定文化財）



喜多院慈眼堂（重要文化財）



中院のシダレザクラ



日枝神社（重要文化財）



喜多院山門（重要文化財）



仙波東照宮拝殿（重要文化財）



仙波東照宮本殿（重要文化財）



喜多院界限の様子

(2) 四門前における歴史的風致

川越には、喜多院のほかに、中世以来存在した門前町があり、松平信綱による町割りでは、これを含めた十カ町四門前の町割りが実施された。四門前は一番北に位置する養寿院から南に行伝寺、妙養寺、蓮馨寺となる。

「菓子屋横丁」は養寿院に隣接するくの字型の路地を中心とした界隈である。かつて養寿院門前の一角である。菓子屋横丁は明治の初期、鈴木藤左衛門が江戸っ子好みの気取らない駄菓子を作って売り出したのが始まりという。「菓子屋横丁ができる前にも、同じ町内（高沢町、現元町2丁目）の大蓮寺横丁や隣町の石原などには、早くから駄菓子の業者が散在していたらしい。鈴木藤左衛門もそのひとりで、川越本町から横丁菓子屋に移り住んで『松本屋』を開いたのは明治初年のことである。」（松平誠氏の女子栄養大学栄養科学研究所年報 Vol.4 (1996) 報文「川越菓子屋横丁の形成」より）その後明治の後半からは弟子達ののれん分けにより、菓子職人も作る種類も増え、最盛期の大正末期から昭和初期にかけては、一大菓子製造・卸売りの町に発展した。

菓子屋横丁に大きな影響を与えたのは、大正12年（1923）9月1日に起きた関東大震災である。菓子問屋の多かった東京の神田・浅草・錦糸町などが壊滅的な打撃を受けたのに対し、被害の少なかった川越の菓子屋横丁には、東京方面から仲買人が集中した。今も面影を残す石原町の旅館に泊まり、横丁の菓子を大量に買い求め、東京方面に出荷していった。また、震災の影響で、東京からの渡り職人も入り、新しい菓子作りの技術を残したことも横丁発展の一因となった。昭和初期には少なくとも60余軒が軒を連ねる盛況ぶりであった。「三丑」は、明治18年（1885）に、はじめは鳶頭の住居兼詰め所として建てられ、後に駄菓子の製造小売店に使用された。作業場の屋根には煙出しが残る。「菓匠かとう」は大正初期の建築で、下見板貼りが特徴



昭和30年代頃の菓子屋横丁

の町家である。「森田家」は昭和7年（1932）の建築で、界隈では最も伝統的な格子立ての町家であり、大正末から昭和初期にかけての横丁最盛期の家並みを今に伝える建築である。以上の3軒は都市景観重要建築物などに指定されている。最盛期には及ばなくとも、人情味あふれる横丁の情緒、素朴で懐かしい街角は、今も店奥で打たれるアメ玉や駄菓子とともに、観光客を惹きつけてやまない。

四門前の一つ、「養寿院」は河越太郎重頼の曾孫の経重によって創建された曹洞宗の寺院で、重頼の墓所と伝わる。銅鐘は河越経重が文応元年（1260）に鑄造させたもので、重要文化財に指定されている。毎年秋には重頼にちなんだ茶会を、春には曲水の宴を開催している。養寿院門前には、町家・長屋などの多くを残している。

「行伝寺」と「妙養寺」は日蓮宗の寺院である。行伝寺門前には、料亭の老舗「山屋」があり、玄関口と背後に見える樹木が印象的である。また、現寺町通りの行伝寺以南もかつての行伝寺門前であり、ここに「松本醤油」の蔵造りがある。妙養寺に向かう仲町通り（旧志義町）に面する「塩野住宅」（明治27年（1894）建築）の蔵造りは市指定文化財である。妙養寺門前は、仲町通りの西側への貫通により道路整備がされたが、かつての門前入口と六軒町通りが交差するところには、数軒の町家が残り、往時の面影を伝えている。

「蓮馨寺」は、天文18年（1549）、後北条氏の川越城代大道寺政繁の母・蓮馨尼によって創

建され、政繁の甥の増上寺の第10世住職となった感誉上人を開山とし、江戸時代には、浄土宗の関東十八檀林の1つとして栄えた。川越の校歌によく登場する郷土をあらわす語に「武蔵野」がある。「武蔵三芳野名勝図会」には、川越が武蔵野の境であることを示す榎が蓮馨寺前にたっていたと記されている。感誉上人の孫弟子であり、庶民に親しまれた吞龍上人を祭る吞龍堂があり、毎月8日は縁日「吞龍デー」として賑わう。かつて縁日には、サーカス、見せ物小屋も立ち、また常設の遊園地も一角にあった。現在も、川越祭りには見せ物小屋や遊技系の露店が多く立つ。北参道を横切る蓮馨寺新道には、洗出しモルタルの見事な看板建築の店舗が並ぶ。

蓮馨寺の門前が立門前（旧豎門前）である。

蓮馨寺境内には、設立年代は不明ながら松蓮座という芝居小屋があり、明治26年の大火により、蓮馨寺の伽藍とともに焼失してしまったため、明治31年（1898）、現在の場所に「鶴川座」が建てられた。芝居興業を主として市民に親しまれた。大正時代に入り、活動写真の上映も行われるようになった。

立門前は、昭和8年に蓮馨寺境内を抜けて開通した中央通りと同様、昭和初期に建てられた看板建築が多く残る通りである。川越街道との角に建つ「芋十」（都市景観重要建築物）は一階の矩折れ庇が特長の町家である。明治43年（1910）建築の「旧川越織物市場」もこの通りに面する。

立門前と交差する大正浪漫夢通り（旧猪鼻通り）は、かつて「銀座通り」と呼ばれ、蓮馨寺界隈の賑わいを今に伝える町並みである。「小川菊」は文化文政期（1804～1830）創業のうなぎ店で、川越草分けの店である。現在の建物は、大正13～14年頃の建築で、市内では数少ない木造3階建てである。上の階にいくにつれて道路より後退する屋根と壁面、小割に分割されたガラス戸などが特徴である。隣の酒店「伊勢源」とはレンガ壁を共有する。

江戸の影響を受けた川越では、近くの川や沼で鰻がよく捕れたこともあり、鰻屋が多くできた。かつて、喜多院の堀に湧水があり、そこに生け簀をつくり、新河岸川や入間川で捕ってきた鰻を入れていたという。

立門前との角に昭和5年に建築された「大野



屋洋品店」は和瓦葺の半切妻屋根に、洋風の棟飾りをのせた独特の擬洋風建築。喫茶店の入る「間仁田家」は、アーチ窓が特徴的な看板建築である。これらはすべて都市景観重要建築物に指定されており、市指定文化財である吉田家、大谷石の壁が特徴の加藤家の明治期の蔵造りとともに和洋混在の町並みを形成している。

門前は表通りの余所行きの顔とは異なり、菓子屋横丁や焼だんごの店のように庶民的な顔を覗かせる場所であり、また、料亭のように、まちの懐の深さを見せるところでもある。

川越市内には多くの神社仏閣があり、信仰の対象としてはもちろん、祭りをはじめとする年中行事や花見、遊び場や、憩いの場といった普段の生活に欠かせないシンボル空間であり、門前の佇まいや周囲の景観とともに地域文化を育んでいる。川越のまちの奥行き感は、こうした門前の存在によって成り立っているのである。遠く近くに響く除夜の鐘の音を聞き、思いめぐらすことができるのも川越市民である誇りである。



養寿院・行伝寺界隈の様子